

2016 年度
関西福祉科学大学大学院
社会福祉学研究科
心理臨床学専攻

修士論文題目

父親の育児観と家族に関する考え方についての研究

指導教員 (鎌田 次郎)

社会福祉学研究科 心理臨床学専攻

学生番号 21561005 氏名 段 朋子

序論

1、女性の社会進出と男女平等教育がもたらした家族のかたち

女性の社会進出が叫ばれ、核家族化とともに共働きが当たり前になりつつある昨今、親子関係の中における父子関係のウエイトが大きくなってきた。加藤・黒澤・神谷(2014)によると、核家族化の進行、男女共同参画社会の提唱や母親の就業率の上昇等を背景として、父親の子育て関与は子どもの発達に大きな影響を与え、より切実で重要なものとなったとある。また、柏木(2008)は、その著書の中で、「結婚のかたちや機能、親にとっての子どもの意味、親と子の関係のありようなどは、古今東西同じではなく、発展は必然のことである」と述べており、環境の変化により家族の形態や関係も変わっていくことは現在の日本の状況を考えると自然な流れであるといえよう。

日本では、特にこの 30 年ほどの間に、法的には雇用における男女差がなくなる等、社会環境において大きな変化を遂げてきた。1985 年(昭和 60 年)には「男女雇用機会均等法」が成立し、女性の就業に関する社会の意識が変化するとともに企業のあらたな取り組みなども行われ、女性の働き方やライフサイクルの多様化が顕著となってきた。また 1999 年(平成 11 年)に施行された「男女共同参画基本法」では、基本理念として、「社会における制度または慣行における配慮として、固定的な役割分担意識にとらわれず、男女がさまざまな活動ができるように、社会の制度や慣行の在り方を考える必要がある」、(中略)家庭生活における活動と他の活動の両立として、男女が対等な家族の構成員として、互いに協力し社会の支援も受け、家族としての役割を果たしながら、仕事や学習、地域活動等ができるようにする必要がある」と明記されている。世の中の動きにおいても、2007 年(平成 19 年)頃から「イクメン」という言葉がメディアに登場をし始め、2010 年(平成 22 年)には厚生労働省が「イクメンプロジェクト」を立ち上げ、最近では「イクボス」(部下のワークライフバランスに理解ある上司のこと；朝日新聞, 2016)なる言葉も出てくるなど、父親も家事や育児に関与するための大きな流れができつつある。

また上記のような社会の変化とともに、学校教育も大きく変遷してきた。1989 年(平成元年)に学習指導要綱が改定され、1994 年(平成 5 年)より中学校での家庭科の男女共修が、また翌年には高校においても男女共修が始まり、家庭生活に関して男女平等の教育が受けられるようになった。内容においても、調理や被服などだけではなく、現在では、幼児の発達などの知識とともに、実際に近隣保育園児や幼稚園児との交流を行う授業や、近隣在住の乳児の母親から育児についての話を聞く機会を設ける等、男女ともに子育てに関する細かい知識まで広く習得するようになってきている(鶴田他, 2014)。

このように、この 30 年ほどの間で、社会環境、教育環境が大きく変化してきたことにより、柏木(2008)のいうところの「親にとっての子どもの意味、親子の関係のありよう」は、大きな変化の節目を迎えているといっても過言ではない。

しかしながら、法制度の進展ほどには、現実の父親の家事や育児関与に関して、実態は進んでいないように思われる。柏木(2008)は「父親になるが父親をしない、父親はいるが実際の育児に参加しない場合があり、こうした育児状況は日本の特徴である」と述べている。例えば 1992 年に男性を含むすべての労働者を対象にした「育児休業法」が施行され、すでに 4 半世紀近くが経つが、厚生労働省の「平成 27 年度雇用均等基本調査」によると、企業における男性の育児休業取得率は 2.7%で、女性の 81.5%に比べるとはるかに少ない状況が続いている。また、総務省の「平成 23 年度社会生活基本調査結果」によると、就学前の子を持つ子育て期の育児に費やす時間は母親が 3 時間 15 分であるのに比べ、父親が 37 分と夫婦間で依然として大きな差がみられる。

それに比べると、女性の社会進出は大きく進んだといえるであろう。高学歴化や教育環境に加え、女性自身の労働意欲の高まりや、政府などによる女性の労働力化の促進等、様々な要因が考えられるが、社会に出るまで男女平等に育ってきた現代の女性の立場から考えると、男性と同じように職業を持つことは必然といってもいいだろう。もちろん個々の事例では、「ガラスの天井」など多くの問題や障壁が存在し、また現在も存続している可能性があることは想像に難くない。しかしながら「男女雇用機会均等法」の施行後 10 年ほどで、共働き世帯が専業主婦世帯を上回り、2015 年(平成 27 年)には、専業主婦世帯の 687 万世帯に対し、共働き世帯が 1114 万世帯と増加し、社会的な役割では男女の関係性は大きな飛躍を遂げたといっても過言ではない(厚生労働省, 2015)。

そして、この家庭と社会における役割の変化のスピードの違いが、現代の女性の精神的な部分も含めオーバーワーク状態の要因となっていると考えられる。特に家庭生活に育児を伴う場合、物理的かつ時間的な負担は重く、夫がどこまで負担するかということは、家族計画やワークライフバランスを考える上で、とても大きな要因となるだろう。また、男性の家庭関与が妻や子供の精神的健康に影響を与えることは柏木・若松(1994)、平山(2001)、森下・坂西・福田・尾形(2014)、蟹江(2006)をはじめとするいくつかの研究でも確認されている。

一方、父親側の意識はどうであろうか。稼得役割の責任を担っているとの認識のもと仕事偏重の生活を余儀なくされている父親が多いが、ベネッセ教育総合研究所の「第 3 回乳幼児の父親についての調査」によると、「家事育児に今まで以上に関わりたい」と思う父親は 58.2%と 10 年前の調査より 10 ポイント以上増加している。家庭人としての役割を変えたいと思っている割合が次第に高くなっていることが伺える。また佐藤・武石(2004)によると、育児期の子どもを持つ男性の約半数が育児休業取得を希望しているという。

しかしながら、単純に父親が育児に関わればよいというものではなく、父親

のポジティブな関わりが不可欠であると大野(2016)をはじめとする多くの研究者が述べている。大野はジェンダーを男性側から捉え、育児期男性の生き方の多様性が生じたことから、家族観の質に関する概念に注目し、父親による「主体的、応答的、生成的な」家庭関与が必要だと論じており、今後は、このような踏み込んだ研究が増えていくと思われる。

2、少子化と保守的な価値観について

家族について、もう少しマクロな視点である少子化の観点からも論じてみたいと思う。上記の個人的な葛藤は、そのまま社会における少子化や晩婚化へ影響を与えており、人口バランスという視点からも看過できない問題であると思われる。子どもを産む産まないは個人が選択することであり自由である。しかしながら、個人の集合体である社会や国という視点で考えると、「自由である」との言葉で片付けることはできず、産み育てやすい世の中にするには緊急の課題であることは明白である。日本における合計特殊出生率は2005年(平成17年)の1.26を底に緩やかに上昇しているが、人口置換水準(人口が増加も減少もしない均衡した状態となる合計特殊出生率)には程遠く、出生率は上がっても出産適齢期の女性の減少に伴い出生数自体は減少傾向であり、また死亡者数の増加と相まって全体的には人口減少が続くという深刻な状況が続いている。もちろんこれには晩婚化、晩産化、結婚率の低下や経済状況などの様々な要因も考えられる。厚生労働省の人口動態推計によると、平均初婚年齢は男性で31.1歳、女性で29.4歳(2014年)となり、30年前と比べると男女ともに3~4歳上昇している。また、50歳時の未婚割合(生涯未婚率)においては、1980年(昭和55年)と2010年(平成22年)を比較すると、男性は2.6%から20.1%へ、女性は4.5%から10.6%へと上昇しており、結婚しないという生き方を選択することも珍しいことではなくなってきた。

日本だけでなく世界の先進国でも最重要課題とされる少子化問題であるが、様々な要因に対し、効果的な策が講じられていない国も多いのが現状である。これらの背景には、日本と同じく経済状況などとともに急激に進んだ女性の社会進出と高学歴化などに社会が対応できていないことが根底にあると考えられる。出生率以外にこの影響が端的に表れるのは第一子出産時の母親の年齢であろう。日本でも右肩上がりの傾向を示し、平成27年度では30.7歳となっている。ここで興味深い傾向がみえる。欧州などの少子化問題に取り組む国のうち、イタリアやスペインなどの伝統的価値観が根強い国ほど、上記の女性の社会進出と高学歴化などに対応できず、対策に苦戦している。この根強い伝統的価値観に基づく男女の役割意識の強さ、すなわち保守的価値観が強い地域では、表面上の行政施策だけでは、抜本的な少子化解決にはつながらないということを示している。これはもちろん日本においても当てはまり、家制度や家父長制とともに受け継がれてきた国民性としてもつ保守的な価値観はかなり根強く、そ

して根深いものだと考えられる。

ところでこの保守的な価値観は、どのように日本に根付いていったのであろうか。「男性が外で働き、女性は家庭で家事や育児をする」、この日本の伝統的家族の特徴であり性別分業といわれている夫婦の在り方は、実はモダンなものであると筒井(2016)は述べている。比較的自由であった家族関係が、武家の役職や俸禄などが個人ではなく家に引き継がれるようになった頃から、血統を重視し、その地位を男子に継承させる家父長制で男性支配的な家族関係へと移行していったようだ。しかしながら農家や商家はこの限りではなかったと思われる。その後、封建体制は崩れたが、明治時代の「家制度」を基軸とした明治民法により家父長制が支配層から庶民にまで浸透していく。その後、敗戦を経て70年、なぜいまだに保守的な考えが残っているのか。上記の筒井は、さまざまな面から家族を解釈しながらも、結局は「そんなものだよなど、人々が考えているから」と述べている。

3、父親の家事育児関与とジェンダーイデオロギー仮説

父親の家事や育児参加に関する研究は、心理学だけではなく、多岐に渡る領域で継続的に研究がされてきた。例えば社会学においては、家事や育児に関する仮説として、「家庭内需要仮説」「相対的資源仮説」「代替資源仮説」「時間的余裕(制約)仮説」「ジェンダーイデオロギー仮説」などが提起されている。尹・朴・近藤・桐野・中嶋(2010)の研究によると、この中でも「家庭内需要仮説」「代替資源仮説」「時間的余裕(制約)仮説」が父親の育児参加の頻度に関係しているとの結果が出ており、他にもさまざまな研究がなされている。しかしながら本論では、上記仮説の中で特に心理的要因が大きいと思われる「ジェンダーイデオロギー仮説」に注目してみたい。「ジェンダーイデオロギー仮説」とは、性別分業的な考え方に対して肯定的な考えを持っているかどうかで家事分担が決まるのではという仮説である。上記にも述べたが、筒井はその著書の中で、男性の家事や育児参加が進まない要因のひとつは、男女間で家事分担に不公平が生じている理由を「そんなものだよ」と人々が考えているからではないかと記している。また同時に、女性側も「自分の周囲の女性(母親を含めて)が家事をより多く負担していると、それが「当たり前」と思うようになる」ということも述べており、日本のように家事負担がそもそも女性に偏っている国では、いくら女性が家事を多くしても「そんなものだ」と思ってしまうと不満につながりにくい」と述べている。

そこで本論では、このイデオロギー仮説的な考えを、伝統的で保守的な価値観と考え、これまでは、この価値観自体が「父親の育児観や家族に関する考え方」に大きな影響を与え、かつ固定化していたのではないだろうかとの考えのもと、この30年程における社会状況の変化と、家庭科の男女平等教育への変化により「父親の育児観と家族に関する考え方」がどのように変化してきたか

を調査し、他にどのような要因が、各自が持つ「育児観や家族に関する考え方」の形成に関わっているのか等、実際の家事育児への関与度も含め検討していきたいと思う。

4、先行研究等

性役割に関する先行研究では、石黒(1998)が、周囲の他者の内で性役割に肯定的な者が多いほど、本人も性役割に肯定的になると述べている。また、相良(2000)が児童期の性役割態度の発達に関して親や同輩、マスメディアからの影響を論じている。また吉川(1998)の研究によると、伝統・因習的価値志向が性別役割分業の肯定・否定を決する基底的社会意識として機能しており、性別役割分業が否定の方向に向かうためには、伝統・因習的価値志向をより低下させることが、おそらく最も重要でかつ有効であると述べている。また、学歴(教育年数)や生年世代による性別役割分業意識の違いについても述べられている。また、儘田・中山(2006)によると、性役割態度は多次元的であり、平等主義的次元と保守的次元の組み合わせに関連していると述べられている。また、障害児を持つ両親に関する研究においても、父親が伝統的な性役割観を持つ場合に、夫婦の協働感に差が出るということが佐藤(2008)の研究で述べられている。また、父親の家事育児関与に関しては、柏木・若松(1994)が、父親の家事育児参加度の高さが母親の否定的感情の軽減につながると述べている等、上述したように、家族の精神的健康に影響を与えると論じているいくつかの研究がある。他にも仕事観と父親の育児参加に関して、福丸・無藤・飯長(1999)が研究をしており、仕事を生活の中心におく仕事観や否定的な子ども観は父親を育児関与から遠ざけていると述べている。

しかしながらこの 30 年ほどの間の教育環境や社会環境の大きな変化が、幼児期の育児をしている保護者の性役割分業意識や育児観にどのように影響を及ぼしたのかは、まだ明らかにされていないように思われる。

そこで本論では、性役割分業意識や育児観に、教育と社会の変化の影響があったと仮定をたて、まずは、「現在、就学前の子を持ち、かつ家庭科で男女共修の教育を受けてきた父親群」と「現在、就学前の子を持ち、かつ男女共修の教育を受けなかった父親群」、また、「約 15～20 年前に就学前の子の育児を行い、かつ男女共修の教育を受けなかった父親群」の 3 群の父親に対し、育児や家族に対する考え方、またその考えに影響を及ぼしたであろう要因、およびその考え方が実際の育児関与にどのようにつながっているのかの調査を行い、実際にはどうであるかを探索的に明らかにしていく。また、すべてのデータを対象に、各項目がどのように影響しあっているかの検討を行う。さらに、各自が持つ「育児観」は、教育や社会の変化以外に、どのような要因の影響を受けているのかとの視点での分析を行う。さらに、尺度で求めた「性役割の平等意識得点(以下、性役割の平等得点)」や「養育態度の応答性得点」「養育態度の統制得点」が、

他の変数や父親の実際の家事育児関与等とどのような関係にあるのか、分析を行っていく。最後に、共分散構造分析によって、どのような観測変数が、構成概念である「父親の育児観」に影響を与え、父親の家事育児関与を促しているのか、各群ごとの特徴を明らかにしてみたいと思う。

方法

1、調査方法

(1) 調査対象者と配布方法

2016年7月から9月にかけて、大阪府内の私立幼稚園の保護者(父親平均年齢 38.4 歳、SD=5.4。母親平均年齢 37.0 歳、SD=4.7)、および、同府内の私立大学の学生の保護者(父親平均年齢 52.3 歳、SD=5.7。母親平均年齢 50.2 歳、SD=5.3)を対象に調査を行った。幼稚園児の保護者へは、幼稚園を通じて、説明文書と質問紙を同封した封筒を配布し、父母それぞれに該当する質問紙への記入を依頼し、その後、園児持参で回収した。また、大学生にも同様に配布して持ち帰らせ、保護者に記入を求めた後、学生を介して回収を行った。父親用、母親用のそれぞれの質問紙には夫婦単位でのデータの分析ができるよう同じサンプリングを行った。

質問紙は幼稚園において 360 組(父親用質問紙 360 部、母親用質問紙 360 部)配布し、回収は、父親用質問紙 214 部、母親用質問紙 230 部(うち夫婦ともに回収は 213 組)であった。大学においては 330 組(父親用質問紙 330 部、母親用質問紙 330 部)を配布し、回収は父親用質問紙 70 部、母親用質問紙 80 部(うち夫婦ともに回収は 66 組)であった。

(2) 回答者のグループ分け

回収した質問紙をもとに、学校等で受けた教育の違いという観点から『家庭科の男女共修世代か否か』、および、社会的な制度や風潮の違いという観点から『現在幼児の育児をしているか、または過去(約 15~20 年前を想定)に幼児の育児をしていたか』の組み合わせにより、以下の 3 つのグループに群分けをした。なお学習指導要綱の改定により、中学では 1993 年 4 月より、また高校では 1994 年 4 月より家庭科が男女共修となっており、これに該当する 1978 年 4 月以降に生まれた父親を男女共修であるとみなした。また社会的な制度や風潮の違いは、幼児期の子どもの育児を行った時期の違いと考え、現在幼稚園児の保護者と、現在大学生の保護者に分類した。

グループ 1: 男女共修の教育を受け、現在幼児を育児中の幼稚園児の保護者。父親の年齢が 26~38 歳(平均年齢 33.6 歳)の夫婦 97 組。質問紙を持ち帰った子どもの平均年齢 4.1 歳(SD=0.9)。

グループ 2: 男女共修の教育を受けず、現在幼児を育児中の幼稚園児の保護者。父親の年齢が 38~54 歳(平均年齢 42.3 歳)の夫婦 122 組。質問紙を持ち帰った

子どもの平均年齢 4.3 歳(SD=1.0)。

グループ 3：男女共修の教育を受けず、約 15～20 年前に幼児期の育児をした現在大学生(大学院生を含む)の保護者。父親の年齢が 42～70 歳(平均年齢 52.3 歳)の夫婦 66 組。質問紙を持ち帰った子どもの平均年齢 19.7 歳(SD=1.7)。

2、質問紙の内容

(1) 保護者の基礎データ(基本的属性)等

保護者の年齢、子どもの年齢や人数、就業形態、同居家族などについて記入を求めた。本論では、教育背景の違いについての比較も行うため、保護者の生年月日のうち生まれ月までの記入を求め、学年による群分けを行った。

(2) 幼児期における父親の家事や育児への関与状況(父親用質問紙のみ)

父親の帰宅時間や、平日および休日に子どもと過ごす時間、家事や育児への具体的な関与状況について、選択式と記述式で回答を求めた。父親の帰宅時間については、平日の平均的な帰宅時間を 6 件法(午後 6 時まで、午後 6 時～7 時、午後 7 時～8 時、午後 8 時～9 時、午後 9 時～10 時、午後 10 時以降)で求めた。点数の高い方が帰宅時間が早いことを示す。また、子どもと過ごす時間については、平日および休日の平均的な時間を分単位(0 分～1440 分)で記入を求めた。大学生の父親には、子どもが幼児期の頃の関与度についてそれぞれ記入を求めた。質問項目は、ベネッセ教育総合研究所の「第 2 回乳幼児の父親についての調査」の調査票を参考に作成した。

(3) 「平等主義的性役割態度スケール縮小版(SESRA-S)」

鈴木(1994)が作成した「平等主義的性役割態度スケール縮小版(SESRA-S)」15 項目(5 件法)を使用した。性役割態度とは、「性役割に対して一貫して好意的もしくは非好意的に反応する学習した傾向」で、平等主義は「それぞれ個人としての男女の平等を信じること」と定義される。同尺度は、女性の就労や家事に関して肯定的な態度を示す項目 4 項目と、否定的な態度を示す逆転項目 11 項目で構成されている。1～75 点の範囲で、高得点であるほど平等志向的、低得点ほど伝統志向的な態度を示す。以降、「父親 SESRA-S 得点」「母親 SESRA-S 得点」として分析を行った。

(4) 「親の養育態度尺度」

中道・中澤(2003)、中道(2013)の「親の養育態度尺度」16 項目(4 件法)を使用した。「親の養育態度尺度」は、養育態度を「応答性」と「統制」の 2 次元により測定する尺度である。「応答性」は「子どもの意図、欲求に気づき、愛情のある言語や身体的表現を用いて、子どもの意図をできる限り充足させようとする

る行動」であり、「統制」は「子どもの意思とは関係なく、親が子どもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行動」と定義されている。下位尺度の得点はそれぞれの項目(1～4点)の平均点である。「応答性」と「統制」の得点の高低により、「権威的態度」「権威主義的態度」「許容的態度」の3つの型に養育態度を分類し使用することもできるが、本研究ではこの類型化は利用せず、父母それぞれの「養育態度の応答性得点」と「養育態度の統制得点」として、下位尺度の得点を用いて分析した。

(5) 育児観や家族に対する考え方に影響を与えた要因

父親、および母親が持つ『育児観や家族に対する考え方』がどのような要因の影響を受けているかを、「実家の親の養育態度の正の影響」「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響」「友人等の影響」「学校等で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響」「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響」の計5項目に対し、父母それぞれが、どの程度の影響を受けたかを選択式(「非常にあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「あてはまらない」「全くあてはまらない」の6件法、1～6点の範囲で影響が大きければ高得点となる)および自由記述で回答を求めた。

(6) その他

「父親の育児観や家族観」や「実際の育児関与」に関して、自由記述での回答を求めた。自由記述に関しては、上記の(5)と合わせ、のべ194件の意見が集まった。

(7) 統計ソフト

統計には、IBM SPSS Ver.24 と、IBM Amos Ver.19 を用い処理を行った。

結果と考察

1、父親回答の「実際の家事育児関与」尺度の因子分析

Table1 実際の家事育児関与尺度の因子分析結果

	因子負荷量
子供に食事をさせる	0.768
子どものオムツを替える、またはトイレに連れていく	0.718
子どもの着替えを手伝う	0.666
子どもの遊び相手をする	0.665
家事を手伝う	0.608
子どもが病気の時に面倒をみる	0.549
子どもを寝かしつける	0.548
子どもをお風呂に入れる	0.454
子供に勉強などを教える	0.401
子どもの幼稚園や保育園の送り迎えをする	0.358
子どものお稽古事の送り迎えをする	0.256

因子抽出法: 主因子法

父親回答の「実際の家事育児関与」に関する尺度 11 項目について主因子法による因子分析を行った(Table1)。固有値の変化は、4.13、1.25、1.06・・・というものであり、1 因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度 1 因子を仮定して主因子法による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった「子どもの幼稚園や保育園の送り迎えをする」「子どものお稽古事の送り迎えをする」の 2 項目を除外した。この 2 項目を除いた 9 項目の α 係数を算出したところ、0.838 となった。また 9 項目間の相関を調べたところ、すべて正の相関を示した。なおこの 9 項目の合計点を「父親の家事育児関与得点」項目とし、以下の分析を行った。

2、各項目間の相関係数

グループごとの各項目間の関連を検討するために、Pearson の積率相関係数を求めた。結果を Table2～Table4 に示す。考察に関しては、以降の分析の各項目内において取り上げることとする。

Table2 グループ1、調査項目間の相関係数(Pearsonの相関係数)

	平日帰宅時間	平日過ごす時間	休日過ごす時間	家事育児関与得点	父SESRA-S得点	母SESRA-S得点	父養育態度の応答性	父養育態度の統制	母養育態度の応答性	母養育態度の統制
父親の平日の帰宅時間		.638**	.083	.459**	-.038	-.093	.152	.068	-.202	-.033
父親が平日に子どもと過ごす時間			.086	.498**	-.081	-.066	.177	-.034	-.013	.057
父親が休日に子どもと過ごす時間				.354**	.000	-.109	.200	.031	-.081	-.136
父親の家事育児関与得点					.113	.016	.357**	.019	-.058	.070
父親SESRA-S得点						.275**	-.162	.008	-.170	-.220*
母親SESRA-S得点							-.032	-.004	.038	-.012
父親養育態度の応答性得点								.271**	.047	-.018
父親養育態度の統制得点									-.088	.014
母親養育態度の応答性得点										.399**
母親養育態度の統制得点										

	親の影響(父回答)	親の影響(母回答)	配偶者の影響(父回答)	配偶者の影響(母回答)	友人の影響(父回答)	友人の影響(母回答)	教育の影響(父回答)	教育の影響(母回答)	社会の影響(父回答)	社会の影響(母回答)
父親の平日の帰宅時間	.085	.061	-.101	-.003	.069	.045	-.199	-.057	-.255*	.130
父親が平日に子どもと過ごす時間	-.119	.038	.091	.072	-.085	.021	-.026	-.068	-.089	.082
父親が休日に子どもと過ごす時間	-.065	-.252*	.042	.035	-.032	-.019	.040	-.074	.039	-.027
父親の家事育児関与得点	.017	-.185	.285**	.235*	-.064	.079	.019	.002	-.124	.198
父親SESRA-S得点	-.181	-.116	.259*	.121	.088	.032	.006	.027	.011	-.176
母親SESRA-S得点	.130	-.133	.115	-.071	-.003	-.033	-.065	.009	-.028	.008
父親養育態度の応答性得点	.224*	.192	.225*	.313**	-.070	-.002	.066	-.051	.052	.015
父親養育態度の統制得点	.072	.184	.032	.076	.026	-.202*	-.101	-.243*	-.103	-.122
母親養育態度の応答性得点	-.095	.122	-.125	.186	-.030	.039	.127	.119	.234*	.089
母親養育態度の統制得点	-.081	.099	-.053	.124	.024	.073	.125	.048	-.013	.125
実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)		.119	.208*	.162	.306**	.120	.078	.092	-.041	.066
実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)			.062	.258*	.125	.047	.226*	.056	.045	.192
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)				.370**	.223*	.121	.348**	.094	.126	.059
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)					.195	.222*	.300**	.270**	.143	.250*
友人等の影響(父親回答)						.227*	.392**	.191	.196	.109
友人等の影響(母親回答)							.184	.447**	.089	.362**
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)								.275**	.678**	.133
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)									.217*	.457**
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)										.072
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)										

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※グループ1: 家庭科男女共修の教育を受け、現在育児中の幼稚園児の保護者

Table3 グループ2、調査項目間の相関係数(Pearsonの相関係数)

	平日帰宅 時間	平日過ご す時間	休日過ごす 時間	家事育児関 与得点	父SESRA- S得点	母SESRA- S得点	父養育態度 の応答性	父養育態度 の統制	母養育態度 の応答性	母養育態度 の統制
父親の平日の帰宅時間		.604**		.162	-.045	-.027	-.036	.113	-.096	.062
父親が平日に子どもと過ごす時間			.276**	.526**	.147	.068	.138	.130	.009	-.064
父親が休日に子どもと過ごす時間				.481**	.215*	.272**	.227*	.072	.011	-.079
父親の家事育児関与得点					.264**	.133	.347**	.074	-.057	-.084
父親SESRA-S得点						.215*	.168	.124	.057	-.019
母親SESRA-S得点							-.058	-.026	.118	.156
父親養育態度の応答性得点								.302**	.041	-.125
父親養育態度の統制得点									-.041	.166
母親養育態度の応答性得点										.138
母親養育態度の統制得点										

	親の影響 (父回答)	親の影響 (母回答)	配偶者の影 響(父回答)	配偶者の影 響(母回答)	友人の影響 (父回答)	友人の影響 (母回答)	教育の影響 (父回答)	教育の影響 (母回答)	社会の影響 (父回答)	社会の影響 (母回答)
父親の平日の帰宅時間	-.099	-.075	-.071	-.139	-.070	.059	-.035	-.062	-.061	.013
父親が平日に子どもと過ごす時間	-.145	-.024	-.068	-.025	-.112	-.035	.030	.009	-.157	-.042
父親が休日に子どもと過ごす時間	-.180	-.123	-.048	.055	-.128	-.037	-.003	-.130	-.184	-.290**
父親の家事育児関与得点	-.136	-.119	.154	.106	-.086	.008	.144	-.056	-.007	-.094
父親SESRA-S得点	-.139	.050	.014	.153	-.179	-.144	-.058	-.076	-.067	-.111
母親SESRA-S得点	.096	.067	.094	.067	.054	.139	-.026	-.034	-.068	-.128
父親養育態度の応答性得点	.098	-.042	.223*	-.047	-.006	-.029	.169	.150	-.008	.009
父親養育態度の統制得点	.016	-.052	.114	-.010	.008	.061	-.061	-.096	-.045	-.011
母親養育態度の応答性得点	-.101	.150	-.054	.187*	.026	.163	.008	.130	-.046	.110
母親養育態度の統制得点	.127	.104	.148	.080	.067	.072	-.132	.046	-.062	.057
実家の親の養育態度の正の影響 (父親回答)		.068	.166	.080	.263**	-.140	.163	.120	.231*	.076
実家の親の養育態度の正の影響 (母親回答)			.186*	.239**	.024	.079	.078	.182*	.085	.040
配偶者が父親の育児関与に肯定 的である影響(父親回答)				.129	.200*	-.055	.408**	.132	.468**	.073
配偶者が父親の育児関与に肯定 的である影響(父親回答)					.186*	.166	.204*	.176	.202*	.195*
友人等の影響(父親回答)						.203*	.397**	.191*	.159	.150
友人等の影響(母親回答)							.013	.362**	-.085	.241**
学校で父親も育児をすべきとの教 育を受けた影響(父親回答)								.257**	.650**	.106
学校で父親も育児をすべきとの教 育を受けた影響(母親回答)									.050	.600**
社会的に父親も育児をすべき風 潮である影響(父親回答)										.100
社会的に父親も育児をすべき風 潮である影響(母親回答)										

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※グループ2:家庭科男女共修の教育を受けず、現在育児中の幼稚園児の保護者

Table4 グループ3、調査項目間の相関係数(Pearsonの相関係数)

	平日帰宅 時間	平日過ご す時間	休日過ごす 時間	家事育児関 与得点	父SESRA-S 得点	母SESRA-S 得点	父養育態度 の応答性	父養育態度 の統制	母養育態度 の応答性	母養育態度 の統制
父親の平日の帰宅時間		.471**	-.063	.230	.110	-.048	-.098	-.080	-.103	-.235
父親が平日に子どもと過ごす時間			.526**	.430**	.269*	-.016	.221	-.191	.102	-.118
父親が休日に子どもと過ごす時間				.460**	.116	-.192	.310**	-.061	.284*	.031
父親の家事育児関与得点					.329**	-.118	.581**	-.148	.127	-.190
父親SESRA-S得点						.297*	.155	-.085	.138	-.082
母親SESRA-S得点							.022	.315**	-.011	.081
父親養育態度の応答性得点								.278*	.372**	.119
父親養育態度の統制得点									.061	.228
母親養育態度の応答性得点										.177
母親養育態度の統制得点										

	親の影響 (父回答)	親の影響 (母回答)	配偶者の影 響(父回答)	配偶者の影 響(母回答)	友人の影響 (父回答)	友人の影響 (母回答)	教育の影響 (父回答)	教育の影響 (母回答)	社会の影響 (父回答)	社会の影響 (母回答)
父親の平日の帰宅時間	.051	.042	.024	.036	.065	-.317**	-.026	-.245	-.015	-.134
父親が平日に子どもと過ごす時間	.060	.059	.111	.175	-.189	-.234	-.264*	-.228	-.126	-.283*
父親が休日に子どもと過ごす時間	.110	-.028	.305*	.351**	-.220	-.135	-.141	-.259*	-.017	-.283*
父親の家事育児関与得点	.368**	.020	.428**	.466**	-.046	-.196	.061	-.257*	.076	-.216
父親SESRA-S得点	.160	-.043	-.127	.201	-.145	-.160	-.082	-.089	-.076	-.263*
母親SESRA-S得点	-.013	-.234	-.122	-.149	-.074	-.038	.113	.095	.179	-.001
父親養育態度の応答性得点	.261*	-.028	.363**	.416**	.106	-.103	.296*	-.197	.213	-.186
父親養育態度の統制得点	-.129	.063	.020	.042	.173	.034	.328**	-.007	.316**	.118
母親養育態度の応答性得点	.020	.147	.066	.265*	.029	.105	-.224	-.255*	-.149	-.180
母親養育態度の統制得点	-.085	.050	-.235	.084	.035	.273*	-.134	.130	-.214	-.040
実家の親の養育態度の正の影響 (父親回答)		.011	.238*	.162	.131	.064	.159	-.188	-.055	-.264*
実家の親の養育態度の正の影響 (母親回答)			-.029	.389**	.305*	.159	.177	.234	.114	.060
配偶者が父親の育児関与に肯定 的である影響(父親回答)				.289*	.135	-.025	.260*	-.129	.234	-.090
配偶者が父親の育児関与に肯定 的である影響(母親回答)					.045	.075	.051	.004	-.036	-.156
友人等の影響(父親回答)						.353**	.457**	.166	.367**	.156
友人等の影響(母親回答)							.014	.297*	.051	.113
学校で父親も育児をすべきとの教 育を受けた影響(父親回答)								.148	.699**	.114
学校で父親も育児をすべきとの教 育を受けた影響(母親回答)									.204	.450**
社会的に父親も育児をすべき風 潮である影響(父親回答)										.189
社会的に父親も育児をすべき風 潮である影響(母親回答)										1

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※グループ3:家庭科男女共修の教育を受けず、約15~20年前に幼児の育児をした保護者

3、教育の違いによる各項目への影響の検討

家庭科の男女共修の影響を調べるため、いずれも現在幼児を育児中のグループ1とグループ2に関して、Table5に示す各項目についてt検定を行った。

その結果、「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)」(t=3.04, df=208, p<0.01)と、「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)」(t=2.13, df=214, p<0.05)について、グループ2よりも、グループ1の方が有意に高い得点を示していた。教育の違いによる影響が予想された「SESRA-S得点」(性役割の平等得点)、「養育態度の応答性得点」、「養育態度の統制得点」等には大きな差異が見られなかったが、母親の「養育態度の応答性得点」に関してはその差異が有意に近く(p=0.057)、グループ1の方がグループ2より得点が高かった(Table5)。

どちらのグループも現在幼児の育児をしている点は同じであるが、男女共修世代の保護者の方が、自らの育児観を確立していく過程で、より強く配偶者の影響を受けていると思われる。また父母双方に配偶者の考え方が影響しているという結果から、教育の違いにより夫婦間の力動が上下関係から相互的な対等関係へと変わってきていることも考えられる。しかしながら、「母親養育態度の応答性得点」以外では、「SESRA-S 得点」（性役割の平等得点）等には大きな差異は見られず、教育の変化による、父母の性役割観や父親の養育態度への影響はほとんど認められなかった。

Table5 グループ1とグループ2の平均値とSDおよびt検定の結果

	グループ1		グループ2		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.53	1.35	3.36	1.42	0.91	0.57	207	0.365
父親が平日に子どもと過ごす時間	89.01	70.50	92.41	85.03	-0.31	3.43	214	0.753
父親が休日に子どもと過ごす時間	640.63	314.82	588.93	333.13	1.16	0.75	211	0.249
父親の家事育児関与得点	17.32	5.28	17.39	5.78	-0.10	0.14	217	0.922
父親SESRA-S得点	50.10	9.06	49.72	9.25	0.31	0.21	216	0.759
母親SESRA-S得点	52.80	7.98	53.69	8.38	-0.80	0.31	216	0.427
父親養育態度の応答性得点	2.90	0.48	2.90	0.44	0.04	1.19	215	0.967
父親養育態度の統制得点	3.23	0.37	3.15	0.36	1.70	0.05	215	0.090
母親養育態度の応答性得点	3.05	0.31	2.97	0.31	1.91	0.48	217	0.057
母親養育態度の統制得点	3.37	0.34	3.36	0.29	0.21	1.77	217	0.832
実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)	3.10	1.39	3.03	1.36	0.37	0.57	215	0.710
実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)	3.79	1.12	3.48	1.24	1.94	4.43	211	0.053
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	4.07	1.29	3.51	1.40	3.04 **	5.58	208	0.003
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	4.05	1.36	3.65	1.38	2.13 *	2.30	214	0.035
友人等の影響(父親回答)	2.95	1.41	2.92	1.25	0.18	1.77	213	0.855
友人等の影響(母親回答)	3.75	1.21	3.59	1.19	1.00	0.73	215	0.319
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)	2.91	1.44	2.76	1.29	0.78	2.28	213	0.439
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)	3.24	1.16	3.07	1.19	1.09	0.08	214	0.275
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	3.24	1.52	3.21	1.37	0.17	3.52	211	0.862
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	3.66	1.18	3.33	1.33	1.91	5.80	212	0.057

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※グループ1:家庭科男女共修の教育を受け、現在育児中の幼稚園児の保護者

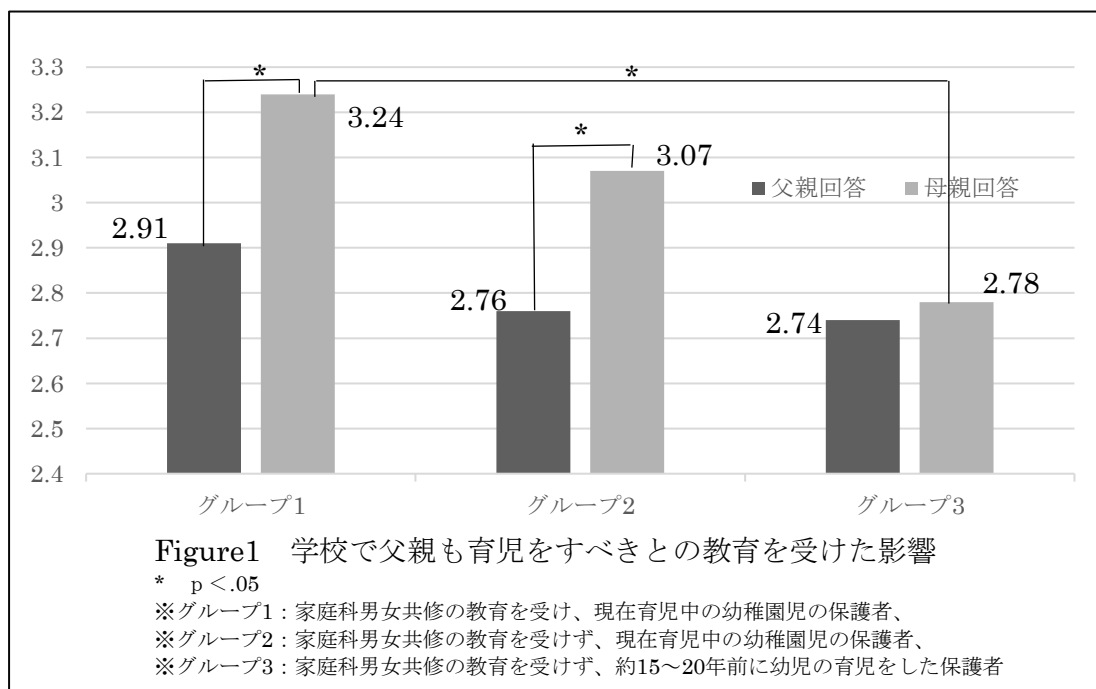
※グループ2:家庭科男女共修の教育を受けず、現在育児中の幼稚園児の保護者

4、グループによって教育の影響度合いをどのように捉えているかの検討

各自の育児観に「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響」をどの程度受けているかとの設問に対する回答についての各グループの平均値をFigure1に示す(点数が高いほど影響度が高いこと示す)。

グループ1の方がグループ2やグループ3より得点が高くなっており、母親に関してはグループ1とグループ3の差は有意である。当然ではあるが、男女

共修世代の方が、父親の育児関与に肯定的な教育を受けたと認識している保護者が多いと思われる。また父母間の点数を t 検定すると、グループ 1 とグループ 2 のいずれにおいても、父親より母親回答の得点が有意に高かった。恐らく教育が変わった当事者の男性より、平等ではない扱いをされていた側の女性の方が「男女共修になったこと」の変化を意識しやすかったのではないだろうかと思われる。



5、社会風潮の違う世代間比較による各項目への影響の検討

育児を行う時期における社会制度や風潮の違いによる各項目への影響を調べるため、いずれも男女共修ではないが、育児をした時期の違うグループ 2 とグループ 3 に関して、Table 6 に示す各項目について t 検定を行った。

その結果、「父親が休日に子どもと過ごす時間」(t=3.73, df=184, p<0.001) について、グループ 3 よりも、グループ 2 の方が有意に高い得点を示していた。また、教育の違いと同じく、社会の変化によっても、「SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)、「養育態度の応答性得点」「養育態度の統制得点」等には大きな差異が見られなかった(Table 6)。

「父親が休日に子どもと過ごす時間」に関しては、グループ 1 とグループ 3 においても差が出たので、考察は後述したいと思う。また、「SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)等には大きな差異は見られず、社会の変化による性役割観や養育態度への影響はほとんど認められなかった。

Table6 グループ2とグループ3の平均値とSDおよびt検定の結果

	グループ2		グループ3		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.36	1.42	3.35	1.57	0.01	1.56	178	0.991
父親が平日に子どもと過ごす時間	92.41	85.03	97.83	100.64	-0.39	0.00	187	0.694
父親が休日に子どもと過ごす時間	588.93	333.13	398.62	341.63	3.73 ***	0.05	184	0.000
父親の家事育児関与得点	17.39	5.78	18.10	5.66	-0.82	0.00	190	0.412
父親SESRA-S得点	49.72	9.25	49.57	7.66	0.11	3.29	189	0.910
母親SESRA-S得点	53.69	8.38	53.45	9.06	0.18	0.09	185	0.856
父親養育態度の応答性得点	2.90	0.44	2.79	0.52	1.59	0.58	188	0.114
父親養育態度の統制得点	3.15	0.36	3.08	0.37	1.36	0.28	188	0.176
母親養育態度の応答性得点	2.97	0.31	2.99	0.35	-0.43	0.69	189	0.668
母親養育態度の統制得点	3.36	0.29	3.30	0.34	1.23	0.73	189	0.219
実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)	3.03	1.36	2.84	1.15	1.03	4.52	164	0.305
実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)	3.48	1.24	3.37	1.19	0.59	0.19	189	0.557
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	3.51	1.40	3.59	1.35	-0.35	0.40	187	0.726
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	3.65	1.38	3.75	1.60	-0.44	2.73	187	0.662
友人等の影響(父親回答)	2.92	1.25	2.93	1.27	-0.07	0.02	186	0.944
友人の影響(母親回答)	3.59	1.19	3.27	1.37	1.61	4.99	128	0.111
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)	2.76	1.29	2.74	1.28	0.12	0.01	185	0.904
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)	3.07	1.19	2.78	1.24	1.56	0.71	188	0.121
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	3.21	1.37	3.06	1.23	0.74	2.15	185	0.459
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	3.33	1.33	3.13	1.35	0.99	0.07	188	0.321

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

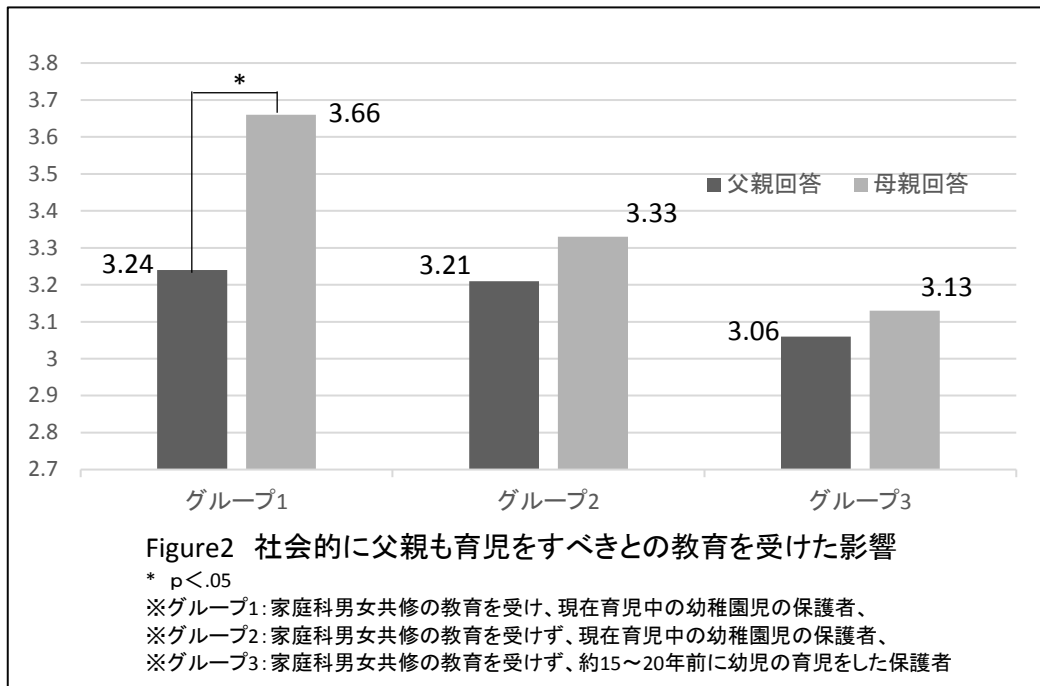
※グループ2:家庭科男女共修の教育を受けず、現在育児中の幼稚園児の保護者

※グループ3:家庭科男女共修の教育を受けず、約15~20年前に幼児の育児をした保護者

6、グループによって社会風潮の影響度合いをどのように捉えているかの検討

各自の育児観に「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響」をどの程度受けているかとの設問における平均値を Figure2 に示す。父母ともグループ 1の方がグループ 2やグループ 3より得点が高くなっているが、有意に近かったのはグループ 1とグループ 2の母親回答間だけであった。また父母間での t 検定によると父親より母親回答の方がグループ 1で有意に高かった。

男女共修世代の方が、また父親より母親の方が、社会風潮における平等化をより認識しているということであろう。これも前述の教育と同じく、平等ではない扱いをされていた側の女性の方が「社会風潮が変わったこと」を実感しやすかったのではないだろうかと思われる。



7、教育と社会風潮の両方の影響についての検討

教育の違いと、社会的背景の違いの両方の相乗効果的な影響について調べるため、グループ1とグループ2とグループ3の3つのグループを独立変数、Table7に示す各項目を従属変数とした分散分析を行った(Table7, Table8)。

その結果、「父親が休日に子どもと過ごす時間」($F(2, 279)=11.63, p<0.001$)、「父親養育態度の統制得点」($F(2, 284)=3.91, p<0.05$)、「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)」($F(2, 281)=5.00, p<0.01$)、「友人等の影響(母親回答)」($F(2, 284)=3.05, p<0.05$)、「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)」($F(2, 283)=3.61, p<0.05$)において、主効果がみられた(Table7)。

グループ間の差異が予想された「SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)、「養育態度の応答性得点」「養育態度の統制得点」に関しては、「父親養育態度の統制得点」以外は、有意な主効果が見られなかった。「父親 SESRA-S 得点」に関しては、グループ別の平均値の差異はほとんどなかった(グループ1の平均 50.1, SD=9.1、グループ2の平均 49.7, SD=9.3、グループ3の平均 49.6, SD=7.7)。

主効果が有意であったものを対象に、多重比較は Tukey の HSD 法(5%水準)を行った。「父親が休日に子どもと過ごす時間」ではグループ3がグループ1と2に比べ、有意に低い得点を示していた。「父親養育態度の統制得点」「友人等の影響(母親回答)」、「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)」では、グループ1がグループ3に比べ、有意に高い得点を示していた。「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)」では、グループ1がグル

ープ 2 に比べて有意に高い得点を示していた。

「父親養育態度の統制得点」と、「友人等の影響(母親回答)」、「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)」は、グループ 1 とグループ 3 の間でのみ有意になっており、教育と社会風潮の両方の相互作用的な影響があると思われる。「友人等の影響(母親回答)」に関しては、SNS の浸透などにより、友人との交流がしやすくなったなどの影響も考えられる。また、「父親養育態度の統制得点」に関しては、子どもの育児に主体的に取り組んでいる父親が増えてきたということかもしれない(Table8)。

Table7 グループ1、グループ2、グループ3の分散分析

	df	平方和SS	平均平方MS	F 値	p
父親の平日の帰宅時間	2	1.92	0.96	0.47	0.627
	271	556.65	2.05		
	273	558.57			
父親が平日に子どもと過ごす時間	2	3125.73	1562.87	0.22	0.804
	282	2021189.89	7167.34		
	284	2024315.63			
父親が休日に子どもと過ごす時間	2	2518901.49	1259450.75	11.63 ***	0
	279	30224848.16	108332.79		
	281	32743749.65			
父親の家事育児関与得点	2	29.29	14.64	0.47	0.626
	286	8928.51	31.22		
	288	8957.79			
父親SESRA-S得点	2	13.32	6.66	0.09	0.918
	285	22208.56	77.93		
	287	22221.88			
母親SESRA-S得点	2	43.89	21.95	0.31	0.734
	281	19879.33	70.75		
	283	19923.22			
父親養育態度の応答性得点	2	0.68	0.34	1.53	0.219
	284	63.67	0.22		
	286	64.35			
父親養育態度の統制得点	2	1.05	0.53	3.91 *	0.021
	284	38.20	0.14		
	286	39.25			
母親養育態度の応答性得点	2	0.37	0.19	1.78	0.17
	285	29.56	0.10		
	287	29.93			
母親養育態度の統制得点	2	0.20	0.10	0.99	0.372
	285	28.71	0.10		
	287	28.91			
実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)	2	2.86	1.43	0.82	0.442
	284	496.11	1.75		
	286	498.97			
実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)	2	8.43	4.21	2.97	0.053
	284	402.38	1.42		
	286	410.80			
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	2	18.26	9.13	5.00 **	0.007
	281	513.20	1.83		
	283	531.47			
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	2	8.82	4.41	2.16	0.117
	281	572.91	2.04		
	283	581.73			
友人等の影響(父親回答)	2	0.06	0.03	0.02	0.983
	282	484.54	1.72		
	284	484.60			
友人等の影響(母親回答)	2	9.38	4.69	3.05 *	0.049
	284	437.18	1.54		
	286	446.56			
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)	2	1.52	0.76	0.42	0.655
	281	504.83	1.80		
	283	506.35			
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)	2	8.46	4.23	2.99	0.052
	282	398.64	1.41		
	284	407.10			
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	2	1.47	0.74	0.38	0.684
	280	542.34	1.94		
	282	543.81			
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	2	11.88	5.94	3.61 *	0.028
	283	466.26	1.65		
	285	478.14			

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※グループ1:家庭科男女共修の教育を受け、現在育児中の幼稚園児の保護者

※グループ2:家庭科男女共修の教育を受けず、現在育児中の幼稚園児の保護者

※グループ3:家庭科男女共修の教育を受けず、約15~20年前に幼児の育児をした保護者

Table8 グループ1、グループ2、グループ3の多重比較

	(I) グループ	(J) グループ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	p
父親が休日に子どもと過ごす時間	1	2	51.693	45.325	0.49
		3	242.002 *	51.947	0
	2	1	-51.693	45.325	0.49
		3	190.308 *	49.960	0.001
	3	1	-242.002 *	51.947	0
		2	-190.308 *	49.960	0.001
父親養育態度の統制得点	1	2	0.085	0.050	0.21
		3	0.159 *	0.058	0.017
	2	1	-0.085	0.050	0.21
		3	0.074	0.055	0.371
	3	1	-0.159 *	0.058	0.017
		2	-0.074	0.055	0.371
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響 (父親回答)	1	2	0.561 *	0.186	0.008
		3	0.488	0.213	0.059
	2	1	-0.561 *	0.186	0.008
		3	-0.073	0.204	0.931
	3	1	-0.488	0.213	0.059
		2	0.073	0.204	0.931
友人等の影響(母親回答)	1	2	0.163	0.170	0.601
		3	0.479 *	0.195	0.039
	2	1	-0.163	0.170	0.601
		3	0.315	0.186	0.21
	3	1	-0.479 *	0.195	0.039
		2	-0.315	0.186	0.21
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響 (母親回答)	1	2	0.326	0.175	0.153
		3	0.526 *	0.203	0.027
	2	1	-0.326	0.175	0.153
		3	0.200	0.194	0.556
	3	1	-0.526 *	0.203	0.027
		2	-0.200	0.194	0.556

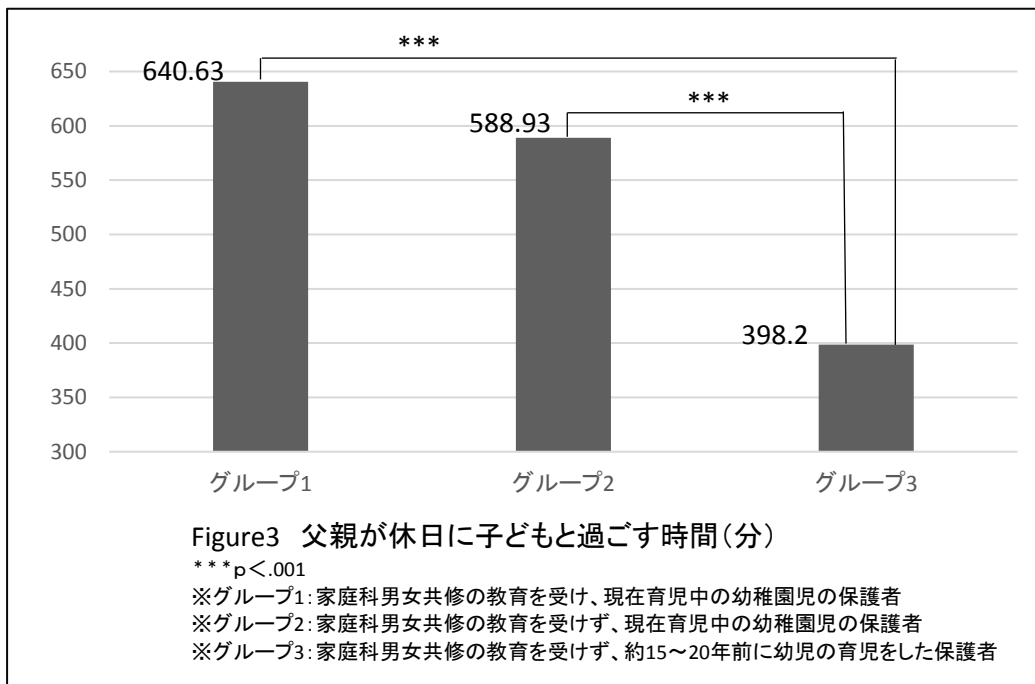
* 平均値の差は 0.05 水準で有意である。

※グループ1:家庭科男女共修の教育を受け、現在育児中の幼稚園児の保護者

※グループ2:家庭科男女共修の教育を受けず、現在育児中の幼稚園児の保護者

※グループ3:家庭科男女共修の教育を受けず、約15~20年前に幼児の育児をした保護者

大きく差が出たのは、「父親が休日に子どもと過ごす時間」であった(Figure3)。グループ1とグループ3、グループ2とグループ3で有意であり、前者はグループ1の方が240分以上長く、後者はグループ2の方が190分以上長かった。グループ1とグループ2の比較では有意ではなかったことから、どちらかというとな教育より社会風潮の違いの方が影響は強いと考えられる。休日に子どもと過ごす時間は、仕事からの帰宅時間に左右されず、父親の主観的な育児観を表している項目であると思われるので、この結果は注目に値する。グループ1では1日のうち641分を、グループ2では589分を子どもと過ごす時間としており、睡眠時間等をのぞくと一日の大半を子どもと過ごしていることになる。現在育児をしている父親の方が、より意識をして子どもとの時間を取ろうとしているのかもしれない。



8、 『育児観や家族に関する考え方』に影響を与えた各要因に関する検討①

父親と母親の『自分の育児観や家族に関する考え方』に影響を与えた以下 a～j の各要因について、「非常にあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」の回答者を『影響を受けた』群(高群)とし、また、「全くあてはまらない」「あてはまらない」「ややあてはまらない」の回答者を『影響を受けなかった』群(低群)として 2 群にわけ、その差の検討を行うために、Table9~Table15 に示す各項目について t 検定を行った。

a、「実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)」

「父親養育態度の応答性得点」($t = -1.98, df = 283, p < 0.05$)において、「実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)」の『影響を受けた』群(高群)の方が『影響を受けなかった』群(低群)より有意に高い得点を示していた(Table9)。考察は下記 b にて述べることとする。

Table9 父親回答の「実家の親の養育態度の正の影響」得点の高低群別平均値とSDおよびt検定の結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.45	1.42	3.38	1.43	-0.40	0.01	270	0.690
父親が平日に子どもと過ごす時間	81.94	83.66	99.78	83.09	1.78	1.37	281	0.076
父親が休日に子どもと過ごす時間	555.63	322.04	564.81	354.65	0.22	0.57	278	0.824
父親の家事育児関与得点	17.81	5.51	17.39	5.63	-0.64	0.24	285	0.526
父親SESRA-S得点	49.05	8.25	50.48	9.11	1.37	1.99	285	0.171
母親SESRA-S得点	53.57	8.22	53.27	8.53	-0.29	0.78	280	0.769
父親養育態度の応答性得点	2.93	0.47	2.82	0.47	-1.98 *	0.29	283	0.049
父親養育態度の統制得点	3.16	0.38	3.16	0.36	-0.04	0.19	283	0.969
母親養育態度の応答性得点	2.98	0.31	3.01	0.33	0.82	0.04	284	0.411
母親養育態度の統制得点	3.35	0.31	3.34	0.32	-0.31	0.17	284	0.759

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

高群:父親回答の「実家の親の養育態度の正の影響」を受けた群

低群:父親回答の「実家の親の養育態度の正の影響」を受けなかった群

b、「実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)」

「父親の家事育児関与得点」(t=3.13, df=285, p<0.01)において、「実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)」の『影響を受けなかった』群(低群)の得点の方が、『影響を受けた』群(高群)より有意に高い得点を示していた。母親の実家の親の世代を考えると、時代的にも家庭内での父親の家事育児への貢献度は低いと考えられ、そのことを反面教師として現在の家庭では、父親の育児関与を促している可能性が考えられる。また、「母親養育態度の応答性得点」(t=-2.10, df=284, p<0.05)について、「実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)」の『影響を受けた』群(高群)の方が『影響を受けなかった』群(低群)より有意に高い得点を示していた。上記 a の父親の結果に関しても同じ傾向を示しており、「応答性」ということなので、自らの親との関係性の良かった部分をわが子の育児に取り入れていることを表していると考えられる(Table10)。

Table10 母親回答の「実家の親の養育態度の正の影響」得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.40	1.49	3.44	1.34	0.23	1.58	271	0.820
父親が平日に子どもと過ごす時間	86.78	83.47	100.60	85.24	1.34	0.11	281	0.182
父親が休日に子どもと過ごす時間	530.17	306.73	609.43	389.07	1.89	2.59	278	0.060
父親の家事育児関与得点	16.73	5.42	18.84	5.64	3.13 **	0.04	285	0.002
父親SESRA-S得点	49.62	8.64	49.99	9.04	0.34	1.19	284	0.732
母親SESRA-S得点	53.10	8.71	53.56	7.71	0.45	0.90	280	0.654
父親養育態度の応答性得点	2.87	0.48	2.88	0.48	0.12	0.00	283	0.902
父親養育態度の統制得点	3.17	0.38	3.14	0.36	-0.80	1.17	283	0.427
母親養育態度の応答性得点	3.03	0.31	2.95	0.34	-2.10 *	0.00	284	0.037
母親養育態度の統制得点	3.36	0.32	3.32	0.31	-1.15	0.01	284	0.250

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

高群:母親回答の「実家の親の養育態度の正の影響」を受けた群

低群:母親回答の「実家の親の養育態度の正の影響」を受けなかった群

c、「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)」

「父親の家事育児関与得点」(t=-3.48, df=282, p<0.01)と「父親養育態度の応答性得点」(t=-3.10, df=280, p<0.01)について、「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)」の『影響を受けなかった』群(低群)よりも『影響を受けた』群(高群)が有意に高い得点を示していた。下記 d の「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)」の結果も含め、配偶者の考えは父母双方に影響を与えており、配偶者が育児関与に肯定的であればあるほど、養育態度の応答性が高くなり、父親の家事育児関与につながっていることが読み取れる(Table11)。

Table11 父親回答の「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響」得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.38	1.46	3.49	1.35	0.64	0.69	267	0.526
父親が平日に子どもと過ごす時間	92.02	86.60	93.35	79.18	0.13	0.93	278	0.899
父親が休日に子どもと過ごす時間	580.11	319.64	514.23	363.15	-1.56	1.59	275	0.119
父親の家事育児関与得点	18.41	5.59	16.05	5.24	-3.48 **	0.24	282	0.001
父親SESRA-S得点	50.18	8.69	49.21	9.00	-0.89	0.25	282	0.373
母親SESRA-S得点	53.57	8.00	53.00	9.03	-0.54	1.83	277	0.589
父親養育態度の応答性得点	2.94	0.45	2.76	0.50	-3.10 **	0.29	280	0.002
父親養育態度の統制得点	3.18	0.39	3.12	0.35	-1.30	3.04	280	0.196
母親養育態度の応答性得点	2.99	0.32	3.01	0.33	0.36	0.12	281	0.718
母親養育態度の統制得点	3.36	0.33	3.35	0.29	-0.24	1.97	281	0.811

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

高群:父親回答の「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響」を受けた群

低群:父親回答の「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響」を受けなかった群

d、「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)」

「父親の家事育児関与得点」(t=-2.56, df=282, p<0.05)と「父親養育態度の応答性得点」(t=-3.14, df=280, p<0.01)「母親養育態度の応答性得点」(t=-3.46, df=281, p<0.01)について、「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)」の『影響を受けなかった』群(低群)よりも『影響を受けた』群(高群)が有意に高い得点を示していた。母親は配偶者の応答性へも影響しており、父親より母親の方が、配偶者への影響力が大きいことが伺える(Table12)。

Table12 母親回答の「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響」得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.37	1.48	3.52	3.52	0.77	1.96	268	0.442
父親が平日に子どもと過ごす時間	96.38	91.35	83.28	83.28	-1.35	6.65	229	0.178
父親が休日に子どもと過ごす時間	583.11	327.42	515.68	515.68	-1.53	1.90	276	0.126
父親の家事育児関与得点	18.13	5.50	16.33	16.33	-2.56 *	0.11	282	0.011
父親SESRA-S得点	50.41	8.12	48.36	48.36	-1.84	3.03	281	0.067
母親SESRA-S得点	53.19	8.07	53.52	53.52	0.31	0.60	277	0.755
父親養育態度の応答性得点	2.94	0.45	2.75	2.75	-3.14 **	1.57	280	0.002
父親養育態度の統制得点	3.18	0.37	3.13	3.13	-0.89	1.71	280	0.373
母親養育態度の応答性得点	3.04	0.31	2.90	2.90	-3.46 **	0.14	281	0.001
母親養育態度の統制得点	3.36	0.32	3.32	3.32	-0.92	0.04	281	0.359

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

高群:母親回答の「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響」を受けた群

低群:母親回答の「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響」を受けなかった群

e、「友人等の影響(父親回答)」

「父親が休日に子どもと過ごす時間」(t=2.51, df=276, p<0.05)について、「友人等の影響(父親回答)」の『影響を受けた』群(高群)よりも『影響を受けなかった』群(低群)が有意に高い得点を示していた(Table13)。考察は下記 f)において述べることとする。

Table13 父親回答の「友人等の影響」得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.51	1.47	3.35	1.40	-0.95	0.26	268	0.345
父親が平日に子どもと過ごす時間	82.44	73.37	98.31	89.22	1.54	1.86	279	0.124
父親が休日に子どもと過ごす時間	492.88	302.06	597.67	356.27	2.51 *	0.10	276	0.013
父親の家事育児関与得点	17.20	5.13	17.78	5.84	0.85	2.53	283	0.399
父親SESRA-S得点	49.28	8.32	50.22	9.06	0.88	0.38	283	0.381
母親SESRA-S得点	53.60	7.91	53.20	8.67	-0.39	0.87	278	0.697
父親養育態度の応答性得点	2.85	0.48	2.88	0.47	0.45	0.19	281	0.656
父親養育態度の統制得点	3.18	0.36	3.15	0.38	-0.60	0.32	281	0.551
母親養育態度の応答性得点	3.01	0.33	2.98	0.32	-0.79	0.30	282	0.428
母親養育態度の統制得点	3.37	0.32	3.34	0.32	-0.87	2.12	282	0.388

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

高群:母親回答の「友人等の影響」を受けた群

低群:母親回答の「友人等の影響」を受けなかった群

f、「友人等の影響(母親回答)」

「父親 SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)(t=2.28, df=284, p<0.05)について、「友人等の影響(母親回答)」の『影響を受けた』群(高群)よりも『影響を受けなかった』群(低群)が有意に高い得点を示していた。友人等の影響に関する設問では、「父親の育児関与に肯定的な友人の影響」とは明記せず「友人等の影

響」と記したため、「父親の育児関与に肯定的でない友人の影響」も含まれている可能性もある。上記 e の「友人等の影響(父親回答)」の結果と、この母親の結果からは、友人等の影響を受けない方が父親の家事育児関与に肯定的な方向にベクトルが向くように思われる(Table14)。

Table14 母親回答の「友人等の影響」得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.40	1.47	3.45	1.36	0.27	1.14	271	0.784
父親が平日に子どもと過ごす時間	87.68	80.57	100.04	90.68	1.18	0.00	281	0.241
父親が休日に子どもと過ごす時間	557.13	333.01	565.10	358.50	0.19	0.23	278	0.853
父親の家事育児関与得点	17.37	5.70	17.79	5.38	0.61	0.04	285	0.545
父親SESRA-S得点	48.90	8.71	51.37	8.72	2.28 *	0.01	284	0.023
母親SESRA-S得点	53.69	8.38	52.46	8.26	-1.17	0.10	280	0.243
父親養育態度の応答性得点	2.88	0.49	2.87	0.45	-0.16	1.07	283	0.877
父親養育態度の統制得点	3.16	0.36	3.16	0.39	0.08	0.26	283	0.933
母親養育態度の応答性得点	3.03	0.34	2.95	0.28	-2.05 *	7.48	232	0.041
母親養育態度の統制得点	3.39	0.30	3.28	0.34	-2.82 **	1.65	284	0.005

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

高群:母親回答の「友人等の影響」を受けた群

低群:母親回答の「友人等の影響」を受けなかった群

g、「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)」

「父親の家事育児関与得点」(t=-2.03, df=207, p<0.05)と「父親養育態度の応答性得点」(t=-2.79, df=280, p<0.01)において、「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)」の『影響を受けなかった』群(低群)よりも『影響を受けた』群(高群)が有意に高い得点を示していた。前述の Table2~4 (p11~13)の相関では、「父親の家事育児関与得点」との有意な相関はなかったが、平等な教育を受けたと認識している父親は、応答性も高く、実際の家事育児関与につながっている傾向が伺える(Table15)。

Table15 父親回答の「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響」得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.34	1.46	3.46	1.41	0.65	0.20	267	0.514
父親が平日に子どもと過ごす時間	88.26	77.88	94.39	86.75	0.57	0.20	278	0.570
父親が休日に子どもと過ごす時間	573.41	306.73	550.03	355.61	-0.53	3.40	275	0.596
父親の家事育児関与得点	18.44	4.83	17.11	5.84	-2.03 *	5.98	207	0.044
父親SESRA-S得点	50.22	8.37	49.68	9.01	-0.49	1.03	282	0.627
母親SESRA-S得点	53.26	8.20	53.42	8.49	0.15	0.16	277	0.881
父親養育態度の応答性得点	2.98	0.39	2.81	0.50	-2.79 **	3.13	280	0.006
父親養育態度の統制得点	3.18	0.32	3.15	0.39	-0.83	5.96	204	0.408
母親養育態度の応答性得点	3.02	0.34	2.98	0.31	-0.92	1.98	281	0.361
母親養育態度の統制得点	3.35	0.32	3.35	0.32	0.03	0.03	281	0.975

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

高群:母親回答の「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響」を受けた群

低群:母親回答の「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響」を受けなかった群

h、「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)」

「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)」の高低群比較では、有意になるものはなかった(Table16)。Figure1(p15)によると父親に比べ母親の方が教育の変化を認識はしているが、その高低が直接他の項目に及ぼす影響は大きくないようである。しかしながら、Table2~4(p11~13)のグループ別の相関によると、「社会的に父親も育児をすべき風潮であった影響(母親回答)」とはグループ1で $r=.457$ 、グループ2で $r=.600$ 、グループ3で $r=.450$ の相関があり、教育と社会の変化は相乗的な影響を母親に与えている可能性が考えられる。

Table16 母親回答の「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響」得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.25	1.55	3.55	1.33	1.68	5.69	237	0.094
父親が平日に子どもと過ごす時間	85.00	82.33	97.78	86.01	1.26	0.02	279	0.209
父親が休日に子どもと過ごす時間	541.10	304.05	578.16	369.36	0.90	2.20	276	0.370
父親の家事育児関与得点	17.26	5.74	17.73	5.49	0.71	0.03	283	0.478
父親SESRA-S得点	49.40	8.05	50.01	9.26	0.58	2.19	282	0.560
母親SESRA-S得点	53.67	8.69	53.03	7.95	-0.65	0.90	278	0.517
父親養育態度の応答性得点	2.87	0.46	2.89	0.48	0.36	0.46	281	0.717
父親養育態度の統制得点	3.12	0.36	3.20	0.37	1.79	1.13	281	0.074
母親養育態度の応答性得点	3.01	0.35	2.99	0.31	-0.65	1.66	282	0.518
母親養育態度の統制得点	3.37	0.33	3.33	0.31	-0.96	0.27	282	0.336

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

高群:母親回答の「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響」を受けた群

低群:母親回答の「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響」を受けなかった群

i、「社会的に父親も育児をすべき風潮であった影響(父親回答)」

「社会的に父親も育児をすべき風潮であった影響(父親回答)」の高低群比較では、有意になるものはなかった(Table17)。しかしながら、上記 h と同様に、Table2～4 のグループ別の相関によると、「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)」とはグループ 1 で $r=.678$ 、グループ 2 で $r=.650$ 、グループ 3 で $r=.699$ の相関があり、父親に関しても教育と社会の変化は相乗的な影響を与えている可能性が考えられる。

Table17 父親回答の「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響」得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.29	1.44	3.55	1.41	1.51	0.04	267	0.133
父親が平日に子どもと過ごす時間	85.42	73.45	100.29	93.06	1.48	2.65	277	0.139
父親が休日に子どもと過ごす時間	560.80	330.66	551.20	344.60	-0.24	0.79	274	0.813
父親の家事育児関与得点	17.61	5.16	17.54	6.01	-0.11	5.46	274	0.912
父親SESRA-S得点	49.73	8.54	50.05	9.11	0.30	0.62	281	0.763
母親SESRA-S得点	53.26	8.62	53.43	8.13	0.17	0.21	276	0.865
父親養育態度の応答性得点	2.89	0.43	2.84	0.51	-0.94	2.16	279	0.349
父親養育態度の統制得点	3.17	0.34	3.15	0.40	-0.45	4.67	271	0.653
母親養育態度の応答性得点	3.01	0.32	2.98	0.32	-0.58	0.07	280	0.565
母親養育態度の統制得点	3.34	0.32	3.36	0.32	0.43	0.10	280	0.668

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

高群:母親回答の「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響」を受けた群

低群:母親回答の「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響」を受けなかった群

j、「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)」

「父親 SESRA-S 得点」(性役割の平等得点) ($t=2.17$, $df=198$, $p<0.05$)と「父親が休日に子どもと過ごす時間」($t=2.79$, $df=283$, $p<0.01$)において、「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)」の『影響を受けた』群(高群)よりも『影響を受けなかった』群(低群)が有意に高い得点を示していた(Table18)。

「父親 SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)は Table2～4($p11\sim13$)の相関においても、「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)」とはどのグループでも弱い負の相関を示しており、社会の変化の影響で性役割の平等性は上がるのではないかとこの予想と反する結果となった。また、「父親 SESRA-S 得点」と「社会的に父親も育児をすべき風潮であった影響(父親回答)」とは、グループによって正負の違う相関を示しており、世代間で何らかの隔たりがある様子も伺える。

「休日に子どもと過ごす時間」に関しても、Table2～4によると、「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)」「社会的に父親も育児をすべき風潮であった影響(母親回答)」とはどのグループも負の相関を示しており、他の何らかの要因の関与が考えられる。仮定と違う結果となったこれらに関しては更なる検討が必要かと思われる。

Table18 母親回答の「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響」得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.40	1.47	3.43	1.39	0.14	0.85	270	0.888
父親が平日に子どもと過ごす時間	87.22	79.14	99.01	91.26	1.16	1.99	280	0.249
父親が休日に子どもと過ごす時間	522.20	292.43	616.43	396.07	2.17 *	5.30	198	0.031
父親の家事育児関与得点	17.44	5.38	17.60	5.90	0.23	4.80	239	0.815
父親SESRA-S得点	48.59	8.51	51.50	8.90	2.79 **	0.22	283	0.006
母親SESRA-S得点	52.98	8.17	53.84	8.43	0.86	0.25	279	0.390
父親養育態度の応答性得点	2.85	0.47	2.90	0.48	0.90	0.83	282	0.369
父親養育態度の統制得点	3.15	0.36	3.17	0.39	0.26	0.34	282	0.797
母親養育態度の応答性得点	3.00	0.30	2.99	0.36	-0.30	2.70	283	0.762
母親養育態度の統制得点	3.36	0.32	3.33	0.32	-0.55	0.03	283	0.580

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

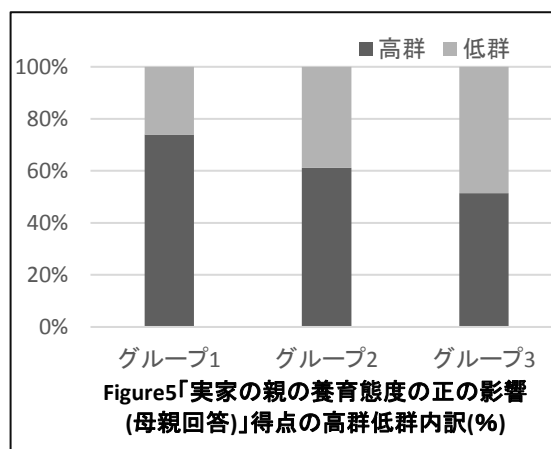
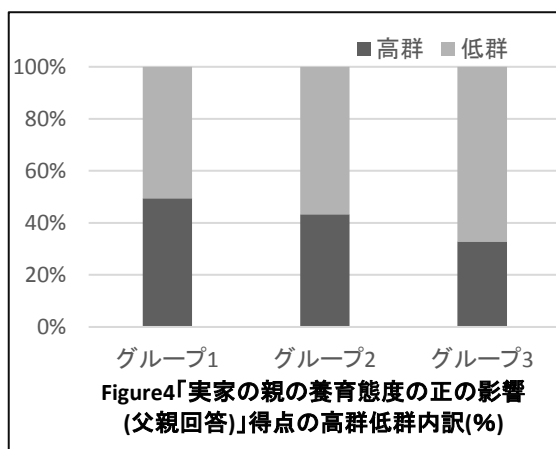
高群:母親回答の「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響」を受けた群

低群:母親回答の「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響」を受けなかった群

以上から、育児観の形成に影響したであろうこれらの要因は、おおむね「父親の家事育児関与得点」と、「父親養育態度の応答性得点」への影響が大きいことが示唆されたが、項目によってはマイナスに働くものがあることがわかった。

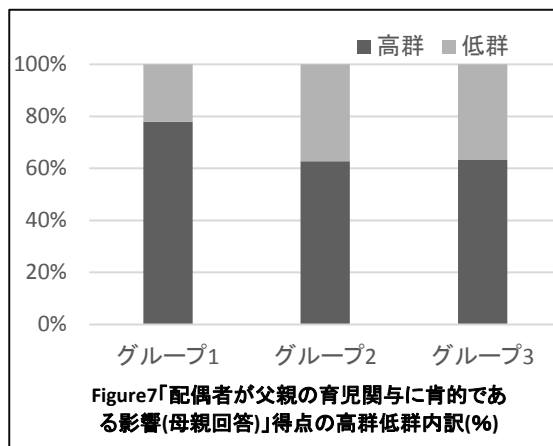
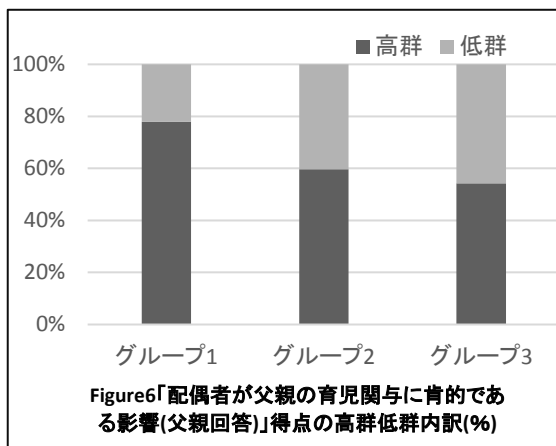
9、 『育児観や家族に関する考え方』に影響を与えた各要因に関する検討②

「育児観や家族に関する考え方」に影響を与えた各要因の、各グループによる捉え方にどのような違いがあるのかを明らかにするために、グループ1(家庭科男女共修の教育を受け、現在育児中の幼稚園児の保護者)、グループ2(家庭科男女共修の教育を受けず、現在育児中の幼稚園児の保護者)、グループ3(家庭科男女共修の教育を受けず、約15~20年前に幼児の育児をした保護者)のそれぞれにおいて、『影響を受けた』群(高群)と『影響を受けなかった』群(低群)とが、どのような割合であるかの内訳を以下に示す(Figure4~13)。

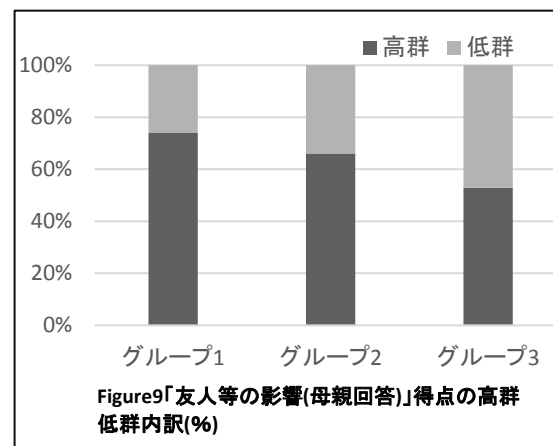
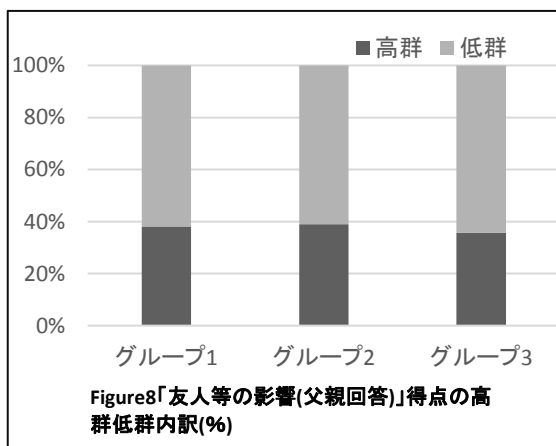


「実家の親の養育態度の正の影響」は、父母どちらも、グループ1、グループ2、グループ3の順で影響を受けていると回答している割合が多い。また、父親より母親の方が多く影響を受けている。実家の親との関係性が、グループ1の

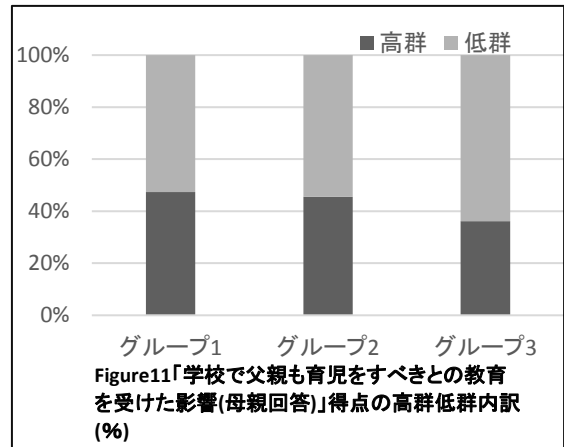
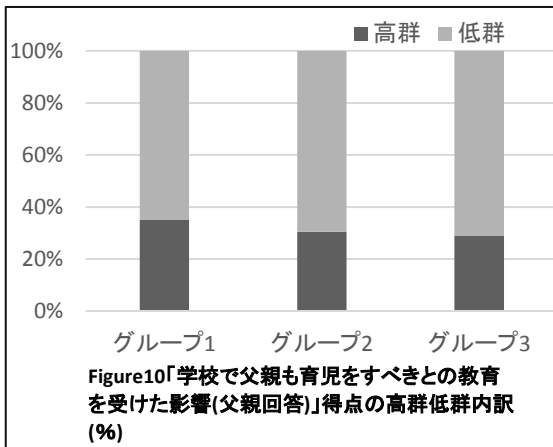
若い世代の方が良かったことが推察できる。



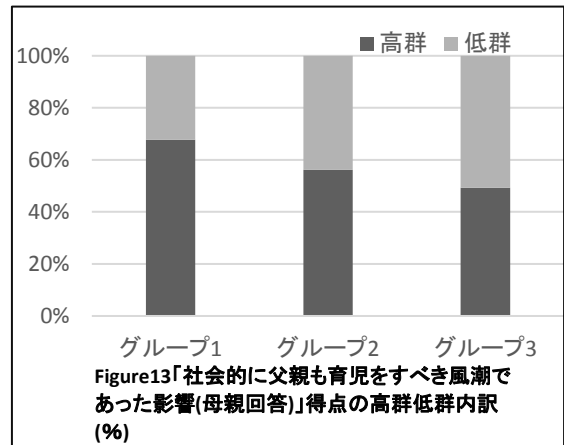
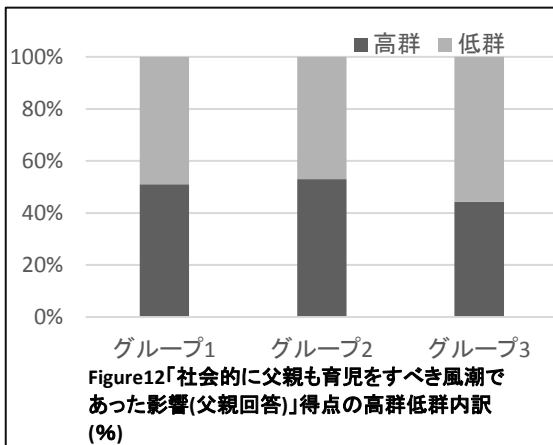
「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響」は、父母どちらも、グループ1の男女共修世代の方が、男女共修でない世代(グループ2、グループ3)より多く影響を受けていると回答している。また、父親より母親の方が若干多く影響を受けている。



「友人等の影響」に関しては、父親においては、どのグループも影響を受けていないとの回答の方が多い。しかしながら母親はどの年代も父親より多く、グループ1、グループ2、グループ3の順で影響を受けていると回答した割合が大きい。子育てに関しては、父親より母親の方が友人のネットワークが広いことが推察される。



父親回答の「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響」においては、影響を受けたと回答した割合は、グループ1の方が若干多めではあるがそれでも35.1%に過ぎず、どの世代も少ない。母親も父親よりは影響を受けていると回答している割合は多いが、グループ1でも47.4%であり、他の要因と比べると「受けた」と回答した割合は低い。



父親回答の「社会的に父親も育児をすべき風潮であった影響」は、現在育児をしている群(グループ1とグループ2)の方が、影響を受けていると回答した割合が大きい。また、母親においては、同じく現在育児をしている群(グループ1とグループ2)の中でも、男女共修世代(グループ1)の方が影響を受けたと回答した割合が大きく、グループ1では高群が67.7%を占めていた。

教育の変化に比べると、社会の変化の影響を受けたと回答した保護者が多かった。教育の変化に関しては、一定の時点における一度の改革であったが、社会の変化はさまざまな改革が行われており、実感しやすいのかもしれないと思われる。

10、SESRA-S 得点と養育態度尺度得点の高群低群による比較検討

「父親 SESRA-S 得点」「母親 SESRA-S 得点」「父親養育態度の応答性得点」

「父親養育態度の統制得点」「母親養育態度の応答性得点」「母親養育態度の統制得点」の各変数を、得点分布の上位 25%を高群、下位 25%を低群として群分けし、Table19～Table22 に示す各項目を従属変数として t 検定を行った。

a、「父親 SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)

「父親の家事育児関与得点」($t=-3.41$, $df=159$, $p<0.01$)、「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)」($t=-2.42$, $df=156$, $p<0.05$)において、「父親 SESRA-S 得点」の『低群』よりも『高群』が有意に高い得点を示していた。性役割に対する考え方と家事育児得点との関連においては、先行研究においても、別の尺度による調査であるが、柏木ら(1994)が、父親の家事育児参加が高い群が、父親の性役割に関する価値観も高いと述べている。しかしながら、父親の性役割意識の強さが直接父親の育児参加に影響するという事は確認されていない(尹他, 2010)と述べている研究もあり、まだまだ議論の余地があるところかもしれない。また「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)」に関しては、父親が平等的な考えを持っているので、ある意味当然のことかもしれない。また、「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)」($t=2.91$, $df=157$, $p<0.01$)において、「父親 SESRA-S 得点」の『高群』よりも『低群』が有意に高い得点を示していた。母親が配偶者の考え方に対してある種の不満をもつことで、社会の変化に敏感になっている可能性も考えられる(Table19)。

Table19 父親SESRA-S得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.38	1.31	3.28	1.39	-0.46	0.88	152	0.649
父親が平日に子どもと過ごす時間	103.07	96.14	78.06	71.14	-1.87	3.78	156	0.063
父親が休日に子どもと過ごす時間	604.86	353.85	546.77	366.54	-1.01	0.28	154	0.317
父親の家事育児関与得点	18.92	6.23	15.93	4.87	-3.41 **	2.19	159	0.001
実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)	2.74	1.31	3.10	1.43	1.64	0.57	158	0.103
実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)	3.37	1.19	3.42	1.23	0.25	0.35	158	0.802
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	3.66	1.47	3.57	1.35	-0.41	1.27	157	0.683
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	4.07	1.41	3.52	1.43	-2.42 *	0.58	156	0.017
友人等の影響(父親回答)	2.74	1.29	2.92	1.24	0.88	0.37	158	0.383
友人等の影響(母親回答)	3.36	1.38	3.71	1.11	1.80	11.45	144	0.075
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)	2.49	1.43	2.82	1.21	1.55	4.02	149	0.123
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)	2.91	1.24	3.06	1.26	0.77	0.02	156	0.443
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	2.95	1.56	3.30	1.28	1.57	6.53	148	0.118
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	3.04	1.34	3.65	1.31	2.91 **	1.67	157	0.004

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

※高群：父親SESRA-S得点上位25%

※低群：父親SESRA-S得点下位25%

「父親 SESRA-S 得点」（性役割の平等得点）に関しては、もう少し詳細に検討すべく、各グループごとにも t 検定を行った (Table19A～Table19C)。

グループ 1(家庭科男女共修の教育を受け、現在育児中の幼稚園児の保護者)では、「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)」(t=2.87, df=53, p<0.01)が、グループ 2(家庭科男女共修の教育を受けず、現在育児中の幼稚園児の保護者)では「父親の家事育児関与得点」(t=3.14, df=73, p<0.01)が、「父親 SESRA-S 得点」の『低群』よりも『高群』が有意に高い得点を示していた。グループ 3(家庭科男女共修の教育を受けず、約 15～20 年前に幼児の育児をした保護者)では「社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)」(t=-2.25, df=27, p<0.05)が、「父親 SESRA-S 得点」の『高群』よりも『低群』が有意に高い得点を示していた。各グループによって、「父親 SESRA-S 得点」の高低による差異が出るものが違った。世代によって「父親 SESRA-S 得点」と影響しあうものが違うのかもしれない。

Table19A 父親SESRA-S得点の高低群別平均値とSDおよびt検定の結果(グループ1)

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の家事育児関与得点	17.35	6.23	16.27	5.72	0.68	0.01	54	0.500
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	4.32	1.47	3.50	1.14	2.87 **	1.90	53	0.006
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	4.17	1.41	3.73	1.41	1.07	0.02	52	0.288
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	3.12	1.56	3.23	1.38	-0.29	3.15	54	0.776
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	3.24	1.27	3.90	1.21	-1.97	1.20	53	0.540

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※高群：父親SESRA-S得点上位25%

※低群：父親SESRA-S得点下位25%

※グループ1：家庭科男女共修の教育を受け、現在育児中の幼稚園児の保護者

Table19B 父親SESRA-S得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果(グループ2)

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の家事育児関与得点	19.37	6.54	15.40	3.88	3.14 **	4.93	73	0.003
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	3.46	1.63	3.46	1.48	-0.01	1.85	72	0.990
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	3.86	1.29	3.38	1.33	1.59	0.13	73	0.117
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	3.03	1.54	3.47	1.25	-1.36	3.65	71	0.178
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	3.17	1.38	3.48	1.30	-0.98	0.83	73	0.331

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※高群：父親SESRA-S得点上位25%

※低群：父親SESRA-S得点下位25%

※グループ2：家庭科男女共修の教育を受けず、現在育児中の幼稚園児の保護者

Table19C 父親SESRA-S得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果(グループ3)

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の家事育児関与得点	20.50	5.43	16.71	5.61	1.88	0.00	28	0.071
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	3.06	1.44	4.00	1.41	-1.80	0.05	28	0.083
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	4.38	1.45	3.46	1.81	1.51	0.94	27	0.143
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	2.50	1.32	3.00	1.18	-1.09	0.99	28	0.285
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	2.44	1.26	3.62	1.56	-2.25 *	0.78	27	0.033

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※高群：父親のSESRA-S合計点上位25%

※低群：父親のSESRA-S合計点下位25%

※グループ3:家庭科男女共修の教育を受けず、約15~20年前に幼児の育児をした保護者

b、「母親 SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)

「母親 SESRA-S 得点」の高低群比較では、特に有意なものはなかった(Table20)。「父親 SESRA-S 得点」と同様に、グループごとの検定も行って見たが、グループ2の「休日に子どもと過ごす時間」(t=4.012、df=66、p<0.001)において、『高群』が『低群』に比べ有意に高い値を示していただけであった。他の項目との相関でも、グループ1~3それぞれにおける「父親 SESRA-S 得点」との弱い相関と、グループ2における「休日に子どもと過ごす時間」との弱い相関以外、有意な相関はなかった(Table2~4)。

母親の性役割に関する考え方は、やはりジェンダーイデオロギー仮説の通り、「そんなもの」と思っていて、他の要因とは関連しにくいのもかもしれない。

Table20 母親SESRA-S得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.31	1.40	3.53	1.37	0.99	0.03	150	0.325
父親が平日に子どもと過ごす時間	90.00	75.03	84.22	72.45	-0.49	0.36	153	0.626
父親が休日に子どもと過ごす時間	589.74	386.70	530.91	321.48	-1.03	0.75	152	0.306
父親の家事育児関与得点	17.73	6.28	17.38	5.19	-0.38	5.35	154	0.707
実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)	3.02	1.23	2.80	1.37	-1.07	2.85	155	0.286
実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)	3.45	1.17	3.56	1.31	0.58	1.54	156	0.563
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	3.73	1.43	3.65	1.33	-0.36	0.69	152	0.717
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	3.71	1.52	3.92	1.35	0.94	1.88	153	0.349
友人等の影響(父親回答)	2.83	1.17	2.91	1.30	0.42	0.73	154	0.675
友人等の影響(母親回答)	3.68	1.21	3.53	1.35	-0.73	2.06	156	0.464
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)	2.64	1.28	2.80	1.46	0.74	2.47	153	0.461
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)	3.04	1.38	3.04	1.19	0.01	3.04	154	0.996
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	3.15	1.37	3.19	1.38	0.16	0.00	152	0.876
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	3.29	1.49	3.48	1.26	0.87	3.46	155	0.384

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※高群：母親SESRA-S得点上位25%

※低群：母親SESRA-S得点下位25%

c、「父親養育態度の応答性得点」(Table21)

「父親が平日に子どもと過ごす時間」($t=-2.44$, $df=168$, $p<0.05$)、「父親が休日に子どもと過ごす時間」($t=-4.02$, $df=167$, $p<0.001$)、「父親の家事育児関与得点」($t=-6.03$, $df=170$, $p<0.001$)、「実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)」($t=-2.09$, $df=169$, $p<0.05$)、「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)」($t=-3.97$, $df=168$, $p<0.001$)「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)」($t=-3.52$, $df=167$, $p<0.01$)「学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)」($t=-2.76$, $df=142$, $p<0.01$)において、「父親養育態度の応答性得点」の『低群』よりも『高群』が有意に高い得点を示していた。多くの項目と関連があり、父親の育児関与に肯定的な考え方や実際の育児関与には、父親の養育態度の応答性が大きく関わっているように思われる。

Table21 「父親養育態度の応答性得点」の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.61	1.55	3.55	1.20	-0.25	8.26	147	0.802
父親が平日に子どもと過ごす時間	110.18	94.30	79.26	70.10	-2.44 *	3.35	168	0.016
父親が休日に子どもと過ごす時間	679.07	316.54	473.81	344.57	-4.02 ***	3.10	167	0.000
父親の家事育児関与得点	19.92	5.75	15.00	4.92	-6.03 ***	0.33	170	0.000
実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)	3.30	1.50	2.85	1.31	-2.09 *	2.51	169	0.038
実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)	3.72	1.20	3.57	1.29	-0.77	1.10	168	0.440
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	4.16	1.43	3.33	1.29	-3.97 ***	0.01	168	0.000
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	4.12	1.37	3.35	1.47	-3.52 **	3.10	167	0.001
友人等の影響(父親回答)	2.88	1.49	2.91	1.28	0.16	3.58	168	0.874
友人等の影響(母親回答)	3.53	1.33	3.64	1.18	0.59	1.49	168	0.556
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)	2.99	1.53	2.42	1.11	-2.76 **	10.74	142	0.007
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)	3.11	1.16	2.99	1.20	-0.66	0.06	167	0.510
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	3.15	1.54	2.98	1.33	-0.78	4.64	157	0.439
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	3.39	1.35	3.36	1.35	-0.14	0.00	168	0.888

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

※高群：父親養育態度の応答性得点上位25%

※低群：父親養育態度の応答性得点下位25%

d、「父親養育態度の統制得点」

「父親養育態度の統制得点」の高低群比較では、特に有意なものはない (Table22)。Table2~4の相関においては、「父親養育態度の応答性得点」と、どのグループも有意になっているが、それ以外の項目との相関においては、相関の大きさも正負も含めて一定の傾向を示していない。前述の7(p17~18)でも述べたが、育児に主体的に取り組んでいるかどうかで、統制得点の捉え方は大きく違ってくるのではないかと思われる。

Table22 父親養育態度の統制得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.75	1.50	3.52	1.33	-0.96	0.69	139	0.338
父親が平日に子どもと過ごす時間	100.41	75.56	96.86	95.83	-0.25	0.23	146	0.804
父親が休日に子どもと過ごす時間	626.91	336.64	546.79	373.41	-1.35	0.92	144	0.178
父親の家事育児関与得点	17.85	4.74	17.70	6.38	-0.17	5.69	143	0.868
実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)	2.94	1.47	3.01	1.28	0.30	2.34	148	0.762
実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)	3.70	1.14	3.43	1.24	-1.41	1.97	148	0.162
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	3.92	1.50	3.62	1.24	-1.35	0.91	148	0.181
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	3.92	1.24	3.70	1.48	-0.95	3.69	146	0.343
友人等の影響(父親回答)	2.86	1.47	2.90	1.24	0.17	3.84	147	0.863
友人等の影響(母親回答)	3.49	1.32	3.58	1.34	0.41	0.00	148	0.681
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)	2.50	1.47	2.58	1.05	0.36	9.25	123	0.718
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)	2.94	1.08	3.09	1.13	0.81	0.23	146	0.419
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	2.86	1.54	2.95	1.23	0.40	9.23	131	0.692
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	3.51	1.25	3.38	1.31	-0.58	0.60	147	0.562

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※高群：父親養育態度の統制得点上位25%

※低群：父親養育態度の統制得点下位25%

e、「母親養育態度の応答性得点」

「父親の平日の帰宅時間」(t=2.01, df=140, p<0.05)について、「母親養育態度の応答性得点」の『高群』よりも『低群』が有意に高い得点を示していた。今回は調査の対象とはしなかったが、この「父親の平日の帰宅時間」には労働時間等も大きく関わってくるため、家庭内の要因だけでは説明は難しいと思われる。

また、「実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)」(t=-2.01, df=144, p<0.05)「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)」(t=-3.52, df=139, p<0.01)について、『低群』よりも『高群』が有意に高い得点を示していた(Table23)。前述の 8-b(p22)にも述べた通り、実家の親との関係性の良い部分を我が子との育児にも取り入れているのではないかと考えられる。

Table23 母親養育態度の応答性得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.07	1.45	3.53	1.29	2.01 *	1.59	140	0.047
父親が平日に子どもと過ごす時間	77.61	78.89	73.18	64.68	-0.37	2.42	143	0.712
父親が休日に子どもと過ごす時間	552.75	348.07	542.05	315.28	-0.19	0.70	142	0.847
父親の家事育児関与得点	16.74	5.13	17.43	5.62	0.78	0.06	145	0.438
実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)	2.94	1.38	3.19	1.31	1.09	1.01	144	0.278
実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)	3.85	1.18	3.45	1.23	-2.01 *	1.61	144	0.046
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	3.68	1.41	3.86	1.32	0.82	1.37	142	0.412
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	4.31	1.29	3.47	1.57	-3.52 **	6.02	139	0.001
友人等の影響(父親回答)	3.03	1.49	2.92	1.22	-0.48	5.03	135	0.633
友人等の影響(母親回答)	3.88	1.22	3.54	1.21	-1.66	1.05	144	0.098
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)	2.87	1.46	2.91	1.37	0.14	1.31	144	0.887
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)	3.17	1.21	3.01	1.28	-0.75	0.57	143	0.453
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	3.34	1.52	3.16	1.44	-0.71	0.05	143	0.476
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	3.53	1.43	3.34	1.33	-0.83	0.16	144	0.407

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※高群：母親養育態度の応答性得点上位25%

※低群：母親養育態度の応答性得点下位25%

f、「母親養育態度の統制得点」

「実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)」(t=-2.30, df=163, p<0.05)「配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)」(t=-2.05, df=162, p<0.05)について、「母親養育態度の統制得点」の『低群』よりも『高群』が有意に高い得点を示していた(Table21)。前述の 8-b(p22)、8-d(p23)では統制得点への影響は出ていなかったもので、一方向への因果関係があると思われる。統制得点は、親が子どもを統制する養育態度であるため、実家の親ともそのような関係であった可能性も考えられる。

Table24 母親養育態度の統制得点の高低群別平均値とSDおよびt検定結果

	高群		低群		t 値	F 値	df	p
	M	SD	M	SD				
父親の平日の帰宅時間	3.40	1.30	3.60	1.37	0.95	0.15	156	0.342
父親が平日に子どもと過ごす時間	82.86	72.19	102.15	77.18	1.64	0.34	161	0.102
父親が休日に子どもと過ごす時間	551.30	309.71	616.41	408.47	1.13	3.47	160	0.258
父親の家事育児関与得点	17.18	5.09	18.66	6.63	1.63	4.58	158	0.106
実家の親の養育態度の正の影響(父親回答)	3.05	1.30	3.00	1.36	-0.24	0.05	163	0.810
実家の親の養育態度の正の影響(母親回答)	3.76	1.22	3.33	1.20	-2.30 *	0.40	163	0.023
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(父親回答)	3.83	1.29	3.73	1.36	-0.43	0.84	161	0.666
配偶者が父親の育児関与に肯定的である影響(母親回答)	4.01	1.33	3.56	1.47	-2.05 *	3.66	162	0.042
友人等の影響(父親回答)	2.91	1.21	2.69	1.30	-1.11	0.25	163	0.267
友人等の影響(母親回答)	3.59	1.28	3.22	1.28	-1.83	0.30	163	0.069
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(父親回答)	2.72	1.21	2.86	1.38	0.68	0.83	162	0.500
学校で父親も育児をすべきとの教育を受けた影響(母親回答)	3.15	1.23	2.98	1.14	-0.95	0.64	162	0.346
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(父親回答)	3.08	1.26	3.23	1.40	0.74	2.06	161	0.462
社会的に父親も育児をすべき風潮である影響(母親回答)	3.54	1.35	3.35	1.26	-0.91	0.19	163	0.365

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

※高群：母親養育態度の統制得点上位25%

※低群：母親養育態度の統制得点下位25%

11、共分散構造分析を用いた実際の父親の家事育児関与に結びつく要因の検討

今回調査した各項目を観測変数とし、それらが、潜在変数(構成概念)として設定した『父親の育児観』へ影響を与え、「平日に子どもと過ごす時間」「休日に子どもと過ごす時間」「父親の家事育児関与得点」などに表れる父親による実際の家事育児関与を促すのではないかと、また、教育や社会背景の違いから、グループによってその影響する観測変数は違うのではないかと仮定のもと、MIMIC モデルによる共分散構造分析を行った。以下に結果のパス図を示す(Figure14~16)。

Figure14~16 の各グループのモデルは、SPSS の分析と、Amos で探索的にパス図の構築を行っていった結果、適合度などを鑑み選択した。

※MIMIC モデル: Multiple Indicator Multiple Cause Model、複数の観測変数によって構成概念が規定され、その構成概念が別の複数の観測変数に影響を与えているモデル。

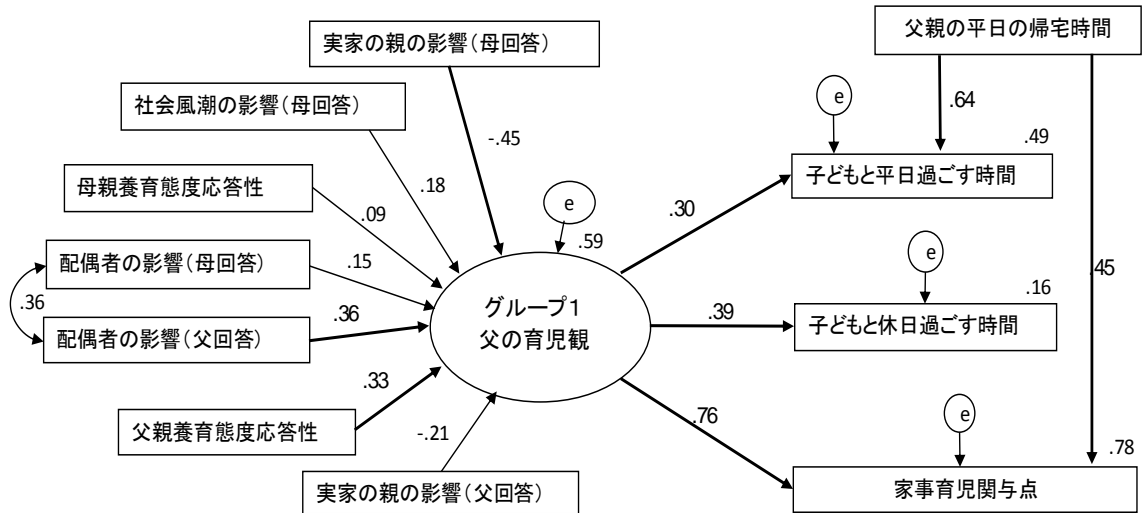


Figure14 グループ1、父親の家事育児関与に関するパス図
 $X^2(42)=65.416$ $p<.05$, CFI=.878, AGFI=.809, CFI=.846, RMSEA=.080, AIC=113.416
 ※グループ1: 家庭科男女共修の教育を受け、現在育児中の幼稚園児の保護者

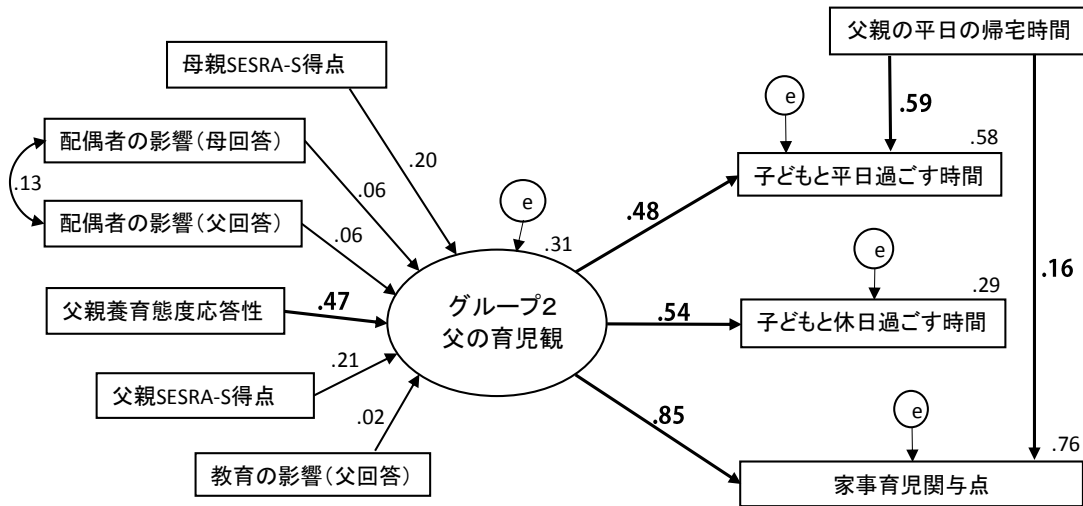


Figure15 グループ2、父親の家事育児関与に関するパス図
 $X^2(33)=68.500$ $p<.001$, GFI=.892, AGFI=.820, CFI=.782, RMSEA=.103, AIC=112.500
 ※グループ2: 家庭科男女共修の教育を受けず、現在育児中の幼稚園児の保護者

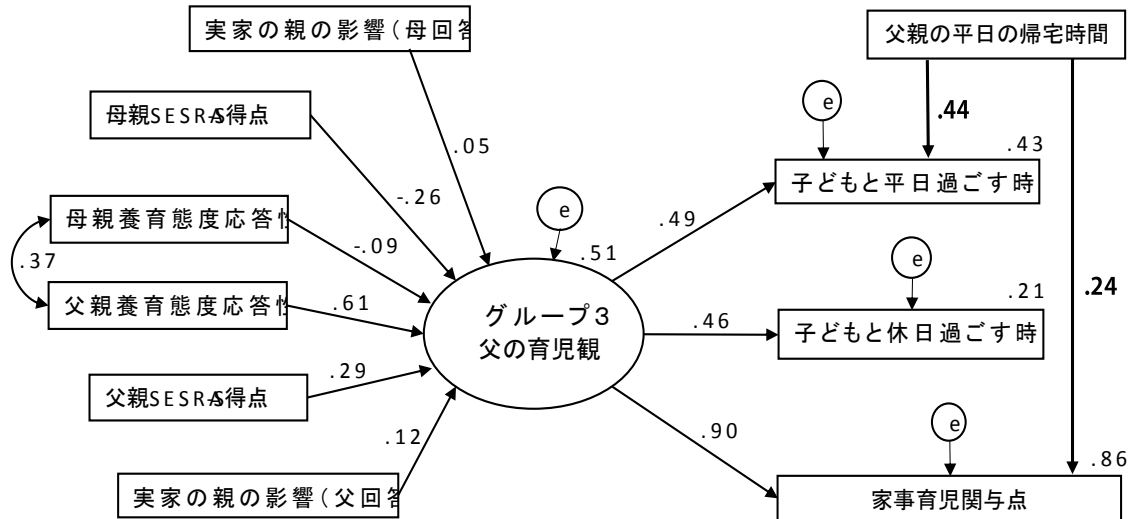


Figure14 グループ3、父親の家事育児関与に関するパス図
 $\chi^2(33)=47.33$ $p=.05$ $GFI=.85$ $AGFI=.75$ $CFI=.83$ $RMSEA=.088$ $AIC=91.33$
 ※グループ: 家庭科男女共修の教育を受け、2年前に幼児の育児をした保護者

データ適合性は、グループ 1 が $\chi^2(42)=65.416$ $p<.05$ 、 $GFI=.878$ 、 $AGFI=.809$ 、 $CFI=.846$ 、 $RMSEA=.080$ 、 $AIC=113.416$ 、グループ 2 が $\chi^2(33)=68.500$ $p<.001$ $GFI=.892$ 、 $AGFI=.820$ 、 $CFI=.782$ 、 $RMSEA=.103$ 、 $AIC=112.500$ 、グループ 3 が $\chi^2(33)=47.337$ $p=.051$ $GFI=.851$ 、 $AGFI=.751$ 、 $CFI=.839$ 、 $RMSEA=.088$ 、 $AIC=91.337$ であり、どのパス図も適合性は概ね良いといえる。

グループ 1 は、母親からの影響項目が 4 つあり、「実家の親の影響(母親回答)」以外はプラスに働いていた。母親の実家の親の影響は、前述 8-b(p22)でも述べたように、母親の実家の親の世代を考えると、時代的にも家庭内での父親の家事育児への貢献度は低いと考えられ、そのことを反面教師として現在の家庭では、父親の育児関与を促している可能性を裏付ける結果であるといえる。また父親においても同様の理由でマイナスになっていると考えられる。また、「社会風潮」などは父親が直接影響を受けているというよりは、母親の考えを通して父親に伝わり、実際の家事育児関与につながっていると思われる。また「配偶者の影響」もグループ 2 に比べるとパス係数が大きい。特に父親はその差も大きく、男女共修世代の方が配偶者の意見を取り入れている父親が多いことがわかる。また、様々な構成のパス図で分析したところ、「SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)は実際の家事育児関与への影響はほとんどないという結果であったので、グループ 1 では、父母ともパス図の項目としては入れなかった(Figure14)。

次にグループ 2 の前にグループ 3 について述べると、母親の「SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)や「養育態度の応答性」がマイナスのパスとなっている。またグループ 1 では大きな要因となっていた「配偶者の影響」項目もグル

ープ 3 では、実際の家事育児関与に影響する項目ではなかった。このグループの父親は配偶者の考えや意見をあまり重視していなかった可能性も考えられる。また、父親の「養育態度の応答性」のパス係数が高いことから、実際の家事育児関与は、父親本人が持つ「応答性」が大きな要因となっていることが読み取れる。また父親の「SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)も「養育態度の応答性」には及ばないものの高いパス係数であり、この群の父親の育児関与には、この 2 つが高い父親が取り組んでいたと思われる (Figure16)。

グループ 2 では、グループ 1 とグループ 3 の中間であることが読み取れる。グループ 3 に比べると配偶者からの影響も多少は受けているが、実際の家事育児関与には、父親本人の「養育態度の応答性」が大きな要因であると思われる。また、このグループにおいては、父母とも、「SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)が父親の家事育児関与に影響していることがわかった (Figure15)。

総合的な考察と今後の課題

1、本研究のまとめ

家庭科男女共修世代の方が、父親母親ともに自らの育児観を確立していく過程で、より配偶者の考え方の影響を双方向に強く受けていることがわかった。また男女共修世代の父親は、教育や社会の影響を、直接ではなく配偶者を通して取り入れることにより、実際の家事育児関与に結びつけていることがわかった。対照的に、約15～20年前に幼児の育児をしていた群では、妻である配偶者の考え等の影響はほとんど受けておらず、父親本人の養育態度の応答性や性別役割に平等的な個人的信念によって、実際の家事育児関与に結びついていたと思われる。また上記二つの間に位置する、男女共修の教育は受けていないが現在幼児の育児をしている群においては、配偶者の影響も少しは取り入れており、しかしながら父親本人の応答性や平等的な考えによって、父親の家事育児関与に結びついているという、ちょうど中間のような結果を示した。育児観そのものよりも、教育や社会の変化で、夫婦の関係性が上下関係から相互的な対等関係へと変わってきていることが伺える。

また、現在幼児の育児をしている父親の方が、約15～20年前に幼児の育児をしていた父親より休日に子どもと過ごす時間が数時間単位で長く、休日は一日の大半を子どもと過ごしていることがわかった。休日に子どもと過ごす時間は、仕事からの帰宅時間に左右されず、父親の主観的な育児観を表している項目であると思われるので、この結果は注目に値する。どちらかという社会風潮の影響が大きいと思われるが、昨今は、休日を「自分のため」ではなく、「子どものため」の時間と考える父親がスタンダードになってきていることが伺える。

教育の影響や社会の影響を受けたとの認識は、どの世代においても父親より母親の方が高かった。これは、平等ではない扱いをされていた女性の方がその変化に敏感であったことが考えられる。また父母共に、「教育の影響」よりも「社会の影響」の方が、「影響を受けている」と回答した保護者が多かった。社会の変化は順次さまざまな改革が行われており、一時期に改訂された教育の変化より、実感しやすかったと思われる。

また、「友人の影響」は若い世代の母親ほど得点が高く、SNSなどの浸透などにより、友人との交流がしやすくなったことなども要因ではないかと思われる。しかしながら父親における「友人の影響」はどの世代も少なく、育児に関するネットワークは母親の方が大きいことがよみとれる。

また父母ともに、「養育態度の応答性」は、実家の親の養育態度や、配偶者の肯定的な考え方の影響を受けていることがわかった。父親に関しては、学校に

における「教育の影響」もあることが伺える。また「父親の家事育児関与」には、父母ともに「配偶者の影響」があり、父親に関しては学校における「教育の影響」もあることが示唆された。父母ともに、配偶者が父親の育児関与に肯定的であればあるほど、父親の「養育態度の応答性」が高くなり、父親の実際の家事育児関与につながっていることがよみとれる。パス解析の結果においても、父親の「養育態度の応答性」は、どのグループにおいても「父親の家事育児関与」に影響するとの結果を示していた。また、父親の「養育態度の応答性」の高低群比較では、「平日に子どもと過ごす時間」「休日に子どもと過ごす時間」「父親の家事育児関与得点」等、多くの項目で高群の方の得点が高かった。父親の実際の家事育児関与には、この応答性が大きく関わっていることがわかった。

父親の「SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)に関しては、世代グループ間で予想されたような平均値の差は出なかった。しかしながら、「SESRA-S 得点」の高群では、「父親の家事育児関与得点」が高かった。また、グループ別に行った父親の「SESRA-S 得点」の高低群による t 検定では、「父親の家事育児関与得点」への影響は、グループ 1 ではほとんどなかったが、グループ 2 とグループ 3 では有意に近い差がみられた。パス解析においても、年齢の高いグループ 2 とグループ 3 では、「SESRA-S 得点」(性役割の平等感)の高い父親が父親の家事育児関与に結びついていたが、若い男女共修世代では、「SESRA-S 得点」と父親の家事育児関与得点には関連がほとんどなかった。男女共修世代では、性役割の平等感がそれまでの世代よりも、重要なファクターではなくなっているのかもしれない。

母親の「SESRA-S 得点」(性役割の平等得点)に関しては、他の項目との関連もあまり見受けられなかった。ある程度、独立した変数であると考えられ、「自分の周囲の女性(母親を含めて)が家事をより多く負担していると、それが「当たり前」と思うようになる」というジェンダーイデオロギー仮説の通り、他からの影響を受けにくい、各自が根強く持つものなのかもしれない。

2、自由記述回答に関して

本論では、自由記述に関しての詳しい分析はできなかったが、いくつか紹介しておきたいと思う。

グループ 1(家庭科男女共修の教育を受け、現在育児中の幼稚園児の保護者)：
「育児は誰かひとりがするものではなく、みんなでするものだと思う(31歳母)」
「頼りになる父親だと思われたい(37歳父)」
「育児は夫婦のバランスを考えてするものであり、他人や社会的風潮に流されてすべきものではない(35歳父)」
「父親も育児に参加することは良いことだが、基本的に家事のすべてを母親がする方がうまくいくと思う(36歳父)」
「休日はほぼ子どもの面倒をみてる(37歳

父)」「男と女は違うので、役割分担があって当然だと思う(37歳母)」「家事育児はどちらかに任せるのではなく、お互い支えあってするのが重要(35歳父)」「自分の父親が家事をしない人だったので、そんな家庭にしたくなかった(31歳母)」「自分が育てられたように育てたい(32歳母)」「女性が働きやすい環境ができていないのが問題(33歳父)」「子どもと接することで人を育てる楽しみを知った(28歳父)」「夫婦で全く違った環境に育ったが、話し合いをしてより良い子育て環境にしたいと思っている(27歳父)」「離婚した元夫は、外で稼ぐことだけがとても素晴らしいことだと思っていた(26歳母)」「育児=親の成長であると感じている(38歳父)」「できるだけ家族と過ごす時間を多くとるよう心がけている。子どもだけでなく、妻も大切にすることが一番大事(38歳父)」「父親はまず第一に家族が困らないようにお金を稼がなくてはいけないと思っている(32歳父)」「妻がこわいので(31歳父)」等

グループ 2(家庭科男女共修の教育を受けず、現在育児中の幼稚園児の保護者):
「母親だけに負担をかけたくない(54歳父)」「父親がもっと家事育児関与したくても、会社や社会がそうになっていない(39歳母)」「子どもと時間を合わせることが難しい(43歳父)」「仕事が不規則で子どもと時間が合わせられない(47歳父)」「母親はできれば働かない方がいい(41歳母)」「情報は育児本からを得た(38歳母)」「2人の子どもなので、できる方ができることをする(42歳母)」「育児は大変。子供は何もわかっておらず、一から基本的な考え方を教えなければならぬ(39歳父)」「2人の子どもなので2人で育児するべき(42歳母)」「主人の父が子育てに協力的なので、自然と主人も自分の子どもの面倒を見るのが当たり前だと思っている(41歳母)」「イクメンは休日に子どもをつれてママは自由な時間を・・・と夫は思っているけど、たまには家事を夫がして、ママは家のことを気にせず子どもとふれあう時間がほしい(40歳母)」

グループ 3(家庭科男女共修の教育を受けず、約15~20年前に幼児の育児をした保護者):
「これからの時代、男の子は仕事も家庭も両立でかわいそう(57歳母)」「父と母がしっかり向き合うことが今となっては大切だったと思う(54歳母)」「子どものことを第一に考えて夫婦で話し合うことが大切(48歳母)」「昭和40年~50年の子どもに厳しいしつけができる父親がいた時代の社会が理想に近かったと思う(52歳父)」「面倒だったことも過ぎれば愛おしいくらい懐かしい。こんな特権を母だけのものにするのはもったいないと思う(62歳母)」「個人の自由だと思うが、各国の文化で同じようになっていると思う(60歳母)」「幼児期は母親が愛情をもって育児をすべき(48歳父)」「母子家庭だが、周囲のたくさんの協力で子育てできた(50歳母)」「今の日本では、職業を持つ父親は育児参加がしにくい(54歳父)」「自分の父親が育児参加する人だったので、何の疑問もなく自分も育児参加している(45歳父)」等

同グループ内でも様々な考え方がることがわかるが、グループ1の保護者の方が、夫婦単位での意見や、配偶者の立場を思っている意見が多いように思うのは筆者だけであろうか。ここにも、夫婦の関係性の違いが読み取れるように思う。

3、総合的な考察と今後の課題

「案ずるより産むがやすし」という言葉がある。激痛を伴い、時には命を落とすこともある出産であるが、「産む」という行為だけをみれば、母親の人生の中では数時間から長くても数十時間のことである。しかしながら、子は「産み」そして「育て」なければならない。通常、この育てるという行為は、子どもが自立をするまで続く。子を持つということは、幸福感や充実感など、多くの感動を親にもたらす。しかしながら、長い育児期間の間には、楽しいことばかりではない。母親の人生という視点からは、子育てに伴い失うものや諦めなければならないことがあるのも事実であり、現在の日本においては、子育てに真摯に取り組めば取り組むほど、諦めなければならないものが大きくなっていく傾向がある。

恐らく、30年ほど前の日本では、女性はこれほどの喪失感を味わうことはなかったのかもしれない。学校を卒業し、あまり責任の重くない仕事に就き、寿退社して家事や子育てに専念する。いわゆる「そんなものだから」という伝統的な性役割観のもと、ある意味ワンパターンな選択肢しかなく、疑問を持つまでに至らなかったと思われる。その後、男女雇用期間均等法が施行され、女性の人生に新たな選択肢がひとつ増えた。しかしながら、伝統的な性役割観は根付いたままで、その新しい選択肢を選んだあと、数年後には、子を持ち仕事における妥協をするか、仕事を全うするために子を持たないかの、どちらかを選ばなければならなくなった。もちろん実家の両親が近くに居る、または配偶者の仕事の融通がききやすい等、様々な要因で仕事と育児を両立できた女性もいるだろう。しかしながら、どちらもフルパワーでこなせた女性はほんの一握りであることは想像に難くない。そして上記のような二者択一状況が少子化の要因になったことも否めないだろう。

家事の分担に関する研究では、岩間(1997)が、平等な家事分担を望む妻ほど不公平感が高く、性別役割分業観を内面化することによって不公平感が緩和されていると述べている。要するに女性自身が「そんなものさ」とあきらめることによって不公平感は緩和されるということであるが、社会という観点で考える場合には、それでは一時しのぎにしかならない。ではジェンダーイデオロギーは、どのようにすればくつがえるのだろうか。例えばデンマークでは、仕事優先であった自分たちの親世代の父親像を反面教師として、現在育児をしている世代の多くの男性が平等的な考えになっている(矢持, 2006)。元々人口の少

ないこともあり(私見であるが、この点に関していえば日本は長い間、人口の多さにあぐらをかいていたとしか思えない)、人的資源の重要性から教育投資や福祉の充実をはかるのも早かったようだが、ひとつ上の世代までは、仕事優先の父親が当たり前であったようだ。他の北欧諸国に比べ育児休業の取得率の男女差などの問題は残るが、短期間で多くの人の性役割観が平等になったのは注目に値する。制度的な施策だけではなく、学ぶべきところがあるように思われる。

もちろん国家財政などの問題もあり、北欧の制度(例えば家族手当や児童手当が充実しており、子どもを持つことに対する経済的負担が少ない)をそのまま日本に持ち込むことは難しいだろうが、舩橋(2004)は、育児に関わりたい男性が、職業生活と育児責任とを両立しうるような社会システムの設計についてもっと研究がすすめられてもいいと述べている。福丸ほか(1999)の研究でも述べられているが、父親の育児関与には労働時間が関わっているのも明確な事実であり、企業での意識変革も大きな要因である。

今回の調査では、グループ間における SESRA-S 得点(性役割の平等得点)の差異があまり出なかった。他の項目が教育や社会の影響で変化を見せていたのと対照的でさえあった。もちろん、これがジェンダーイデオロギーということなのかもしれないが、若い世代では、SESRA-S 得点(性役割の平等得点)に左右されず家事育児に取り組んでいる夫婦の姿が伺えた。しかしながら、他の項目や実際の家事育児関与と密に連動していないということは違和感を覚える。今後は、儘田ほか(2006)が述べているような、もう少し踏み込んだ多次元的な性役割観をもとに他の項目との関連を調べる調査が必要なかもしれない。

謝辞

本論文を作成するにあたって、指導を賜りました鎌田次郎教授、また Amos での分析にご助言いただきました宇恵弘教授に厚く御礼申し上げます。また、調査に協力していただいた大学の保護者の皆様、幼稚園の保護者の皆様、お忙しい中、調査書の配布回収にご協力いただきました柏木雄次郎教授をはじめとする大学の先生方、および幼稚園の園長先生とすべての先生方に心から感謝いたします。

文献

- 朝日新聞. (2016). 子育ての理想と現実 イクボスめざし試行錯誤. 2016年11月13日朝刊
- ベネッセ教育総合研究所. (2009). 第2回乳幼児の父親についての調査研究レポート. http://berd.benesse.jp/jisedaiken/research/pdf/research09_15.pdf(2016.12.25)
- ベネッセ教育総合研究所. (2014). 第3回乳幼児の父親についての調査研究レポート. <http://berd.benesse.jp/jisedai/research/detail1.php?id=48933>(2016.12.25)
- 土肥 伊都子・釣谷 恵美. (2009). 養育態度におけるジェンダーの世代間連鎖. 日本教育心理学会総会発表論文集, 51, 48.
- 福丸 由佳・無藤 隆・飯長 喜一郎. (1999). 乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関連. 発達心理学研究, 1999, 第10巻, 第3号, 189-198.
- 船橋 恵子. (2004). 平等な子育てに向かって “夫婦で育児” の四類型 国立女性教育会館研究紀要, 8, 13-23. 2004-08
- 平山 聡子. (2001). 中学生の精神的健康とその父親の家庭関与との関連：父母評定の一一致度からの検討. 発達心理学研究, 2001, 第12巻, 第2号, 99-109.
- 石黒 格. (1998). 対人環境としてのソーシャル・ネットワークが性役割に関する態度と意見分布の認知に与える影響. 社会心理学研究, 第13巻, 第2号, 1998, 112-121.
- 岩間 暁子. (1997). 性別役割分業と女性の家事分担不公平感：公平価値論・勢力論・衡平理論の実証的検討. 家族社会学研究, 1997, 第9巻, 第9号, 67-76.
- 蟹江 教子. (2006). 未就学児を持つ共稼ぎ夫婦における疲労症状. 家族社会学研究, 2006, 第17巻, 第2号, 59-67.
- 柏木 恵子. (2008). 子どもが育つ条件—家族心理学から考える. 岩波新書
- 柏木 恵子・若松 素子. (1994). 「親となる」ことによる人格発達：生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究, 1994, 第5巻, 第1号, 72-83.
- 加藤 道代・黒澤 泰・神谷 哲司. (2014). 夫婦ペアレンティング調整尺度作成と子育て時期による変化の横断的検討. 心理学研究, 2014, 第84巻, 第6号, 566-575.
- 厚生労働省. (2015). 「平成27年度雇用均等基本調査」. <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/71-27.html>(2016.12.25)
- 厚生労働省. (2015). 「平成27年人口動態統計の年間推計」. <http://www.mhlw>.

- go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikai15/index.html(2016.12.25)
- 儘田 徹・中山 和弘.(2006). 異なる性役割態度の併存とその関連要因に関する検討. 国立女性教育会館研究ジャーナル, 2006, 10, 59-70.
- 森下 葉子.(2006). 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究, 2006, 第 17 卷, 第 2 号, 182-192.
- 森下 葉子・坂西 友秀・福田 佳織・尾形 和男.(2014). 専業主婦家庭の父親のワーク・ライフ・バランスと家族：ライフステージごとの変化. 日本教育心理学会総会発表論文集, (56), 213, 2014-10-26
- 内閣府男女共同参画局.(1999).「男女共同参画社会基本法」. http://www.gender.go.jp/about_danjo/law/kihon/9906kihonhou.html(2016.12.25)
- 中道 圭人.(2013). 父親・母親の養育態度が幼児の自己制御に及ぼす影響. 静岡大学教育学部研究報告, 人文・社会・自然科学編, 63, (2013), 109-121.
- 中道 圭人・中澤 潤.(2003). 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連. 千葉大学教育学部研究紀要, 51, (2003), 173-179.
- 大野 祥子.(2012). 育児期男性にとっての家庭関与の意味：男性の生活スタイルの多様化に注目して. 発達心理学研究, 2012, 第 23 卷, 第 3 号, 287-297.
- 大野 祥子.(2016). 「家族する」男性たち：大人の発達とジェンダー規範からの脱却. 東京大学出版会
- 相良 順子.(2000). 児童期の性役割態度の発達：柔軟性の観点から. 教育心理学研究, 48.2, (2000), 174-181.
- 佐藤 博樹・武石 恵美子.(2004). 男性の育児休業. 中公新書
- 佐藤 奈保.(2008). 乳幼児期の障害児をもつ両親の育児における協働感と相互協力の関連. 千葉看護学会誌, 第 14 卷, 第 2 号, 46-52.
- 総務省統計局.(2011).「平成 23 年社会生活基本調査結果」.<http://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/pdf/gaiyou2.pdf> (2016.12.25)
- 鈴木 淳子.(1994). 平等主義的性役割態度スケール短縮版(SESRA-S)の作成心理学研究. 1994, 第 65 卷, 第 1 号, 34-41.
- 戸田 まり.(2009). 親子関係研究の視座. 教育心理学年報, 第 48 集, 173-181.
- 鶴田 敦子他 62 名.(2014). 「技術・家庭教科書[家庭分野]」. 開隆堂
- 筒井 淳也.(2016). 結婚と家族のこれから. 光文社新書
- 矢持 有希子・朴木 佳緒留.(2006). デンマークにおける男性の育児関連休業取得の課題：デンマーク人男性への聞き取り調査を中心に. 神戸大学発達科学部研究紀要, 14.1, (2006), 79-88.
- 尹 靖水・朴 志先・近藤 理恵・桐野 匡史・中嶋 和夫.(2010). 父親の育児参加の促進・阻害要因に関連する仮説の実証的検討. 評論・社会科学, 94, 15-26, 2011-01
- 吉川 徹.(1998). 性別役割分業意識の形成要因：男女比較を中心に. ジェンダーと階層意識, 1995 年 SSM 調査研究会, 第 14 卷, 49-70.